

---

# 風の聖痕 ~ 風の王と龍脈の守護者 ~ 第一部

零月

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

風の聖痕 ～風の王と龍脈の守護者～ 第一部

### 【Nコード】

N2006B

### 【作者名】

零月

### 【あらすじ】

1999年、東京は寛永寺で起こった凶星の者と宿星に導かれた魔人達との決戦から、三年後……彼等はそれぞれの生活へと戻って行った。《鳳凰》の力を宿す光の剣士と蒼き風の術者、彼等の再会が魔人達をある退魔の一族の争いに巻き込まれていく。

## 序章：『過去』

1999年一月：東京寛永寺

歴史の表舞台では…イヤ、裏側でさえも、けして語られる事は無いがそこで世界の運命を左右する一つの戦いが行なわれた。

龍脈の力を手にしようとした一人の男と運命に翻弄され、その傀儡にされた一人の青年と彼らの戦いは結末を迎え、彼らは最後の敵とも言える存在との決戦に挑んでいた。例えそれが人を超えた《魔人》と言える《力》を持った彼等であっても、巨象と蟻との戦いともいえる圧倒的な力を持った黄金の龍と。

巨大な黄金の龍 黄龍 と対峙している高校生程度の年齢の三十人ほどの男女の中から一人の青年が歩き出す、黄金の龍を象った手甲を両腕に付けたその青年は仲間達に視線を向けると。

「清明、ミサちゃん、弦月、それから…」

そこまで言うとその青年はもう一人、日本刀を持った青年に視線を向ける、視線を向けられた青年はそれを覚悟していたように小さく頷く。

「翔。オレの身に黄龍を降ろす、オレごと黄龍を封印してくれ。」

「ああ。」

他の仲間達が彼のその言葉に全ての言葉を失っている中で翔と呼ばれたその青年だけが冷静な口調でそう答える。

「翔、てめー!!! 何、冷静に言っただやがる!!! 自分が何を言っただのか、分かっているのか!？」

赤い髪と木刀を持った青年が自分が翔と呼んだ青年に掴みかかる。

「…ああ…京一。全部分かっている、これが大きな賭けだと言う事もな。」

京一と呼んだ青年の手を振り解くと翔と呼ばれた青年は一人、黄龍に向かって進んでいく青年に視線を向ける。

「逝くな、龍麻! まだ早エ!!!」

京一と呼ばれた青年が叫び続ける、龍麻と呼ばれた青年は微笑を浮かべて仲間達に視線を向けるとゆっくりと口を開く。

「みんな…ありがとう。」

仲間達の制止の言葉を振り切ってその青年は黄金の龍に飲み込まれる。

『龍麻あああああ!!!』

現在…

「はあ…はあ…。夢…なのか？」

その青年…『竜宮 翔』は枕元に置いてある時計を握って自分の元に引き寄せると時計の示す時間に視線を向け、時間を確認するとそのままベッドから降りてカーテンを開け、窓の近くに腰を降ろすと外の景色に視線を向ける。

「…四時半か…早く起きすぎだな…これは。…はあ…寝なおそうにも…もう、眠れそうに無いな。今更、あの時の夢を見てしまうなんて…。」

結局、翔の言っていた賭けには彼は勝った、人の力ではどうにもならない存在に立ち向かう中、誰もが全てを諦める中で彼一人だけが最後まで生きる事を諦めなかった。

「あの状況で最良の選択でも、全員が助かるか自分が唯一の犠牲かという賭け…それもかなりの確立で自分が犠牲になる。誰もがお前が死んだと思った…絶望した…そんな中でお前だけが最後まで生きる事を諦めなかった…あの賭けに勝つなんて…。ホント、今更ながら、すごい奴…すご過ぎる奴だよ、お前はさ…龍麻。」

翔は窓の外の景色を…自分達が、自分の親友が命がけで守ったその

景色を彼はその視界に納め、微笑を浮かべる。

（オレもお前のようにあの時、最後まで諦めなければ…助けられたのか…。）

一瞬だけ俯き表情を曇らせると翔は再び…何事も無かったかの様に微笑を浮かべて、窓の外に広がる景色に視線を戻すと…暗い雰囲気  
で恨み言を呟き始める。

（…それにしても、あの時の最終決戦の夢…久し振りに見たけどな  
…去年見た時には…。）

それを考えた瞬間、翔の表情が曇る…二度と思い出さたくも無いと  
言う、心底嫌そうな表情に。

「………………。嫌な事を思い出したな…オレも…忘れよう…それが懸命だ…永遠に封印しておこう…もう、二度と思いださない様にしよう…何が悲しくて、『ダゴン』と正面からケンカしなきゃならないんだ…。だいたい…あの戦いの時は下級奉仕種族と独立種族ですんだのに…。」

その時の事情を詳しく語るとかつての戦いの中で確認された、この東京の地下に眠る港区と江戸川の地下に眠る二つ《門》…それ以外に存在していた三つ目の《門》が開いた時、翔達…《四霊》の宿星の四人を中心とした別の《宿星》の者達の手により再び閉じられたが…そのとき現れたのが『ダゴン』と呼ばれている存在…そして、翔達はその存在と戦い、かつての最終決戦に匹敵するほどの戦いの中、その戦いに何とか勝利し、翔達の手によって再び《門》の中に戻す事が出来たのだ。

( だいたいどこで調べた…？ 崩れたおかげで少なくとも人からは遠ざける事が出来たけど、あの二つ以外に《門》が有って…しかも…。 )

そこで翔はその表情にこれ以上ないほどの嫌悪を浮かべる。

( 自分の力を過信したバカな魔術師が生贄を使って、《門》を開きやがって…。 しかも、自体が緊急事態だったおかげで連絡も出来ず… 龍麻達の協力も無しにその魔術師や出てきた奴とは、オレ達だけで戦う事に…。 はあー… また思い出してしまった。 )

心の中で長々とすでに現在はこの世にいない、一年前の事件… 翔の言う所の『バカな魔術師』のお蔭で危うく東京が地図から消える事と成りそうだった事件に対する恨み言を言い続けると翔は深い溜め息をつく。

( まったく… あの時の魔術師といい、どこかの退魔の一族連中といい… どうやればあの程度の力であんな風に自惚れられるのか聞きたいな…。 せめて、九角の奴位の力を持つてからにしろ…。 )

翔は天井を見上げながら呆れた様子で力なく呟くと右手を真上に上げて、全身に蒼い《陽》の氣を纏う。

( … オレは運が良かったのか… あいつの犠牲でオレはオレの持つ、この《力》に溺れずに済み… 父さんが自分を犠牲にしてオレを救ってくれた事で憎しみに囚われながら陰に落ちず、奴にも利用されず… オレは龍麻の敵になる事は無かった。 )

翔は視線を窓の外に向けると力なく呟く。

「しかし…またこの夢だ…。今度もまた何かが起こる…そんな気がする…。」

翔は小さな笑みを浮かべて、立ち上がると近くに立てかけてある木刀を手に取った瞬間、その木刀は神々しい《力》を放つ一振りの剣へと姿を変える。

「…まあ、関係ない…何が起ころうがな…。愛刀が無いのは心細いがオレは…イヤ…オレ達は戦うだけだ…。力無き人々の牙となつて…戦えない人々に代わつて…この世の《陰》と…。なあ、あの時、お前がいたら、力を貸してくれたか…和麻…。」

翔は四年前から消息を知らない親友の名を呟く…翔はこの時はまだ気付かなかつた…あの夢は彼との再会と…ある退魔の一族の命運をかけた戦いに巻き込まれる事を暗示する物だと言う事に…。

大地を流れる強大な龍脈の力を宿す事のできる、唯一の存在、『黄龍の器』…それを巡る戦いから数年後、『四霊』の《宿星》の一つ《鳳凰》の《宿星》を持つ青年、不死鳥の光を宿す者と風の王が出会う時、物語の幕が開く…



...^UUU

## 第一章：『再会（前編）』

「趣味悪い……。」

彼、『八神 和麻』がその建物に対する感想はその一言に尽きた。

極彩色に塗られた壁、屋根に鎮座するのは金の鯨：山の手の高級住宅街、さらに言うところは文明開化の発祥の地であり、日本で初めてガス灯が灯り、アイスクリームが発売された場所である。

カラン…

何かが地面に落ちる、乾いた音が聞える…視線を向けてみるとそこには呆然とした顔で目の前に有る建物を見ている青年の姿があった。

（誰だ？ ……あの顔…どこかで見た事が有る様な気が…？）

和麻はその青年に対して、そんな印象を受けたがそれが誰なのかは、すぐには思い浮かばない…。

和麻と同じ黒いジャケットを青いシャツの上に着ていて、呆然とした表情が浮んでいる顔は美形と呼べるだろ、地面には彼が持つていたらしい竹刀袋が転がっている。音の聞え方から考えると中に入っているのは竹刀ではなく、木刀だろうか、それさえなければ普通の大学生と言えるだろう。

それに気が付いたのか、竹刀袋を拾い、その青年も和麻に視線を向けた。

「…さ・最悪…。」

思わず持っていた竹刀袋を地面に落として、呆然とした表情で彼、『竜宮 翔』は未来永劫変わる事の無い感想を呟いた。

(どうすればここまで無茶な物が造れる…これを作った人間に建築家や設計者としてのプライドは無いのか!?)

思わず住んでいる人間ではなく、設計した人間と作った人間に問いただしたくなる…この時点ですでに住んでいる人間の感覚は否定しているようだ…。

(帰りたいがこれも仕事だ…。信用を失う訳にも行かないよな…折角、表舞台に戻ったんだ、うちの組織…。初仕事じゃない事が唯一の救いか…。)

翔はそう考えて必死で自分を納得させている…信用を失ってもいいから、今すぐにもここから帰りたい気分を抑えながら。

(はあ…。ん？ オレを見てる?)

翔は竹刀袋を拾い、自分に視線を向けている青年を見る。

ジーンズにスニーカー、チェックのシャツに翔の着ている物と同じ黒いジャケット、外見と合わせてどこにもいる大学生に見えなく

も無い。

(…誰だ？ オレはあいつを知っている？)

翔の中にそんな考えが浮かんできたが、ここ数年の友人達と照らし合わせても該当する者はいないし、そうだとしたら、向こうから、声を掛けて来るはずなので一通りの心当たりを、否定する。

二人は相手から視線を外し…同じ事を考えていた…。

(…どこであつたかな…？)

お互いが直接相手に聞いてみれば未来は変わったかもしれないが無情にも運命はそれを許してくれなかった。

『八神様、竜宮様ですね？』

何の前触れも無く、インターホンから聞えた声が二人の思考を現実に戻す。

(竜宮…まさか…。)

(八神…？ やっぱり、人違いか…。)

だが…インターホンから聞えた声は二人にある程度の結論を与えた

様だった…。『竜宮』、その名前で和麻の頭の中に一人の人物が浮かび上がった。

『お待ちしてありました。どうぞ、横の通用口からお入り下さい。』

その言葉と同時に門の横にある小さなドアが開いた、そこから勝手に入って来いと言う事らしい。

（お待ちしてありましたって割には随分ぞんざいな扱いだな。）

（扱いがお待ちしていたって感じじゃないな…。まあ、堂々と門をくぐるよりこっちの方がいいか…精神的に…。）

不愉快では有ったが相手はお客さまなので、その感情は心の置くにしまいこみ、近くににいる翔が最初に通用口をくぐり、和麻がその後続く。

塀の内側にはこれでもかとはかりに監視カメラやセンサーの類が溢れ返っていた…よほど後ろ暗い人生を送っているのだろう。

（おいおい…どんな人生送ってるんだ…？ でも、いいお客様になるかもな…。）

翔はそんな事を考えて邪悪な笑みを浮かべる。そんな人生を送っている人間ならば死なない限り、ここで名前を売っておけば彼等にとつていいお得意様になると言う考えからだ。

入り口に向かって歩くと、何台もの監視カメラが和麻と翔を追尾した。ぶしつけな監視人に抱いた殺意に近い苛立ちを、和麻はどうか自制心で押さえ込んだ。そんな和麻とは対照的に、翔は監視カメ

ラの存在は完全に無視していた。

「はあ。」

そんな和麻を一瞥して、翔は小さくため息をつく、内心、『気持ち  
は分かるぞ』と知っているあたり、彼も苛立ちを覚えているのだろ  
う。

彼のため息に気が付いて、和麻はとって喰われそうな凶悪なものか  
ら、軽すぎるほど明るい笑顔へ案内に来たメイドが彼の顔を見る前  
に表情を直す。

「いらっしやいませ、こちらへどうぞ。」

彼女に案内されて、二人は依頼人の待つリビングへと入る。

(帰るときゃよかった…)

案内されたりリビングに入った時、和麻は己の選択を心底後悔した。  
そこには偉そうにふんぞり返った貧相な小男 屋敷の主にして依頼  
人である坂本某 だけでなく、もう一人術者がいたのだ。その術者  
は和麻を見ると一瞬驚愕したが、すぐに唇を歪め、蔑みに満ちた表  
情を浮かべる。

「何だ、あとの二人の術者の一人はお前の事だったのか、和麻。神

凧の嫡子でありながら、無能ゆえに勘当されたお前が、よく術者と名乗れたものだな。」

（神凧？ …それに…『和麻』…？ まあいい、神凧やしろからはあのふざけた内容の宣戦布告を貰ったんだ…少し挑発して実力の程を少し測っておくか。）

その術者の態度に不快感を持っていた翔はその言葉を聞き、一瞬だけ意識が思考の中に入った。ピースが足りなかった記憶と言う名のパズルがそのピースで完成する。

術者の必要以上に説明的な台詞は、明らかに依頼人である坂本に聞かせる為の物だろう。術者 神凧の分家である結城家の末子、慎治は、実に楽しそうに罵倒した。

「それは本当かね！？ 話が違っじゃないか。一流の霊能者だと言うから、君を雇ったんだぞ！！」

慎治の期待通りに、坂本は血相を変えて和麻に詰め寄ってきた。和麻は冷静に、詰め寄られた分後ずさりしながら答える。

「仲介人が何と言ったかは、俺の知った事じゃありません。不服なら俺は帰りますが？」

「ふむ、そうだな…。」

坂本の目が小ずるく光った。和麻のただでさえ少ない勤労意欲が、急速にゼロに近づいていく。

一人、話の展開から離れて、思考の中にいた翔は和麻に視線を向ける

「和麻か、久し振りだな、元気そうで何よりだ。」

「今頃思い出したか、竜宮。」

実際、二人とも相手の名前を聞いて初めて、思い出したのだが…和麻は最初から知っていたと言ったような口調で言葉を返す。まあ、先に思い出したのは、和麻の方なのだが。

「…だったら、声くらい掛ける。苗字が違うから、他人かと思っただぞ、同名の。」

「何だ、お前、その無能者の…『バキ!』」

彼が言葉を言いきる前に慎治の顔面に翔の持っていた竹刀袋が叩きつけられていた、叩きつけられた事に気が付いた時には、その一撃で壁に叩きつけられている程の、速さの一撃が。

「悪い、そう言う態度でこられると高校時代の経験で、つい殴り飛ばしてしまっただ。」

一言だけそう言いきると翔は再び和麻の方に向きなおす。

「…どういふ高校生活送ったんだ…?」

「何故か、今は故人となった、時代遅れの不良生徒に転校以来、同じ時期に転校した友人と一緒に何度かケンカを売られてな。」

実際には、それだけでは無く、『様々な猟奇事件』と『並の達人の一生分の死闘』を日常的に経験した結果なのだが、それを表に出さ



ず冥福を祈る様に手を合わせながら、翔は簡潔に言い切る。

何故かではなく、故人 世間一般には行方不明 となった理由を知る数少ない人間の一人でもあるのだが：そこまで言う必要は無い。

二人の会話が終った頃に今までの展開を眺めていた坂本の提案で事態は進む：勤労意欲が消えかかっている、二人にしては嫌な展開なのだが。

「こういつのはどうかね？ 君達三人に除霊をしてもらい、成功した者にだけ報酬を払おう。あ、もちろん他の方にも前金を返せとは言わんよ。」

「いい考えですな。」

ふざけた言い草だったが、慎治は了承した。馬鹿にしきった顔で和麻達に問う。

「お前等はどつする？」

「オレは降りる。」

「勝手にしろ。」

上から、和麻と翔の順番で即答した坂本と慎治の侮蔑の視線を完全に受け流しているのか、二人とも表情一つ、眉一筋動かさない。

「ふん、腰抜け共は指をくわえて見ている。炎術の手本を見せてやる。」

「手本、ね。言うじゃないか、分家の末っ子如きが。」

「手本、ね。クッククック…。」

翔は慎治のその言葉を聞き、可笑しそうに笑い始めた。実際、神風の分家レベル、イヤ、炎術師の最上級である、神炎使いと比べても、引けをとらないであろう《朱雀》と《応龍》の宿星を宿した二人の術者を知っている翔にしてみれば冗談にしか、聞えない言葉だったのだ。手本と言うなら、その二人の方が見る価値はある。

「き、貴様等！！！」

今まで見下していた相手に逆に見下され、慎治は激昂した。依頼人の前であるにも係わらず、固めた拳を自分を笑った翔目掛けて振るう。頭蓋骨を陥没させようとする、その拳を翔は体を左に動かし、避けながら竹刀袋の中から、木刀を取り出す。慎治は腰の回転を殺さず、すかさず運動エネルギーを左足に移した。重心を移す運動で翔の死角から後ろ回し蹴りでこめかみを狙う。だが翔は見えているかのような無駄のない動きで、後ろに避ける。左足の踵が数ミリの単位で目の前を通り過ぎる瞬間、抜刀術の要領で翔の振るう木刀が体に叩きつけられる。

「ガハ…。」

体がくの字に折れ、そのままの勢いで弾き飛ばされ、慎治は背中から床に倒れる。

「悪いな…オレは術より、剣の方が得意なんだ…手加減したから、生きてるだろう。」

翔が木刀を構えなおすと木刀は一振りの剣となった。西洋風の剣で

はなく、古代の日本で使われていたようなデザインの剣に姿を変えたのだ。

「神剣：『ふつのみたまのつるぎ布津御魂剣』か。そんな物をどこで手に入れたんだ？」

「…ああ、修行場で拾った…。」

一言だけ、簡潔に答える、正確には『修行場で拾った物を売った店で買いなおした』であるのだが。

翔は倒れている慎治を一瞥すると。

「その程度の動きで俺に当てるのは、千年早い。次は無いぞ。」

「お前、体術で翔に勝てるつもりだったのか？ 四年前のオレにも敵わなかったのが、翔の相手になる訳ねえだろうが。」

本気を出していないと言うレベルではなく、翔の体術は慎治程度を相手にするのは日常の動作と言うレベルである事を今の動きで悟ると和麻は淡々と忠告する。

「だ…黙…!!!!」

慎治は反論しようとするが、翔の一言で精神的に切り捨てられる。

「邪魔だから、帰れ。五流炎術師。イヤ…『無能者』とでも言うておくか。」

「せめて、四流位にしといてやったらどうだ？」

「…イヤ、戦力外、論外、問題外のどれかだろう。まあ、三流以下である事は確定だな。オレ達のレベルでは、捨て駒以下だ。」

息の合った翔と和麻の言葉でさらに慎治の精神に追い討ちを掛けた。

「き、貴様らアアアアアアアアあああああああああああ！

！！」

さらに慎治は激昂する、炎が使えない無能者と術が使えない（と慎治は勝手に思い込んでいる）無能者、彼にとってはゴミ以下の存在である二人の言葉に理性は崩れ落ちていく。

「…鬱陶しい奴だ…。」（この程度の実力で…。）

翔が剣を振るうと叫び声と共に一瞬の光が走り、所々が黒く焦げ、慎治が小刻みに痙攣しながら、倒れている。分家とは言え神風の術者は皆、炎の精霊の加護を受けている、炎では傷つく事は無いが…彼の放った雷はその限りでは無い。

「少し黙れ。」（オレたち鳳にケンカを売るなんて、いい度胸だ。）

ただでさえ、不機嫌さのレベルが上がっていて、完璧に容赦と言う言葉をなくしている翔だった。

「今のは…まさか。」

和麻は驚愕を浮かべながら、翔に視線を向ける…近年、新たに表舞台に現れた新興の退魔組織『鳳』、噂に聞く、そのトップにして、

最強の退魔師は、主に雷術と剣を使い、こう呼ばれている…『光の

プリンス・オブ・ライトニング  
王子』と…。

「そう、オレが…。」

「…『鳳』の『プリンセス・オブ・サンダー』か？ お前…女だったのか？」

和麻の言葉に頭から、ズッコケる翔だった…。

実は『鳳』の中で異名を持つ術者は他に三人いるのだ、『雷の姫』

プリンセス・オブ・サンダー

『風の貴公子』、『灼熱の皇子』等…。新興組織である『鳳』の知名

プリンセス・オブ・ストーム

度強化の為に『風の貴公子』のアイデアで広めたのだが…。異名は噂を広めた張本人が勝手に決めたために、知った後はすでに気に入らなくても訂正できない状況だったのどうする事も出来なかったのだ。なお、噂を広げた張本人が『貴公子』と名乗っているのは本人曰く『王子と言う柄じゃない』だそうだ。

「ちつがあああああーう！！！！ オレはライトニングの方だ！！！！」

気に入らないとは言え、一応は自分の異名なので、『今度はもっと分かりやすい、別の名前を広めよう』と心に誓いながら、翔は和麻に向かつて叫ぶ…戦い方が似ている分だけ、彼女とは時々間違われるのだ…性別は違うのに…。彼の顔つきは美形と呼べるが女には間違われることは無い（少なくとも本人はそう思っている）のだが…。

「貴様等あ！！！！」

翔の雷術が与えた全身の麻痺から立ち直った慎治は起き上がり、激昂して叫ぶ。

雷術は炎術級のエネルギー量を持ち、物質界では風よりも速く、使い方しだいでは物理的な感知能力だけならば、風術と同等にも出来る。

だが、雷術：イヤ、対人戦における電撃の真の恐ろしさはそれではない、通常人体をコントロールしているのは脳だが、脳からの指示は神経を伝う電気信号で送られるのだ。感電した場合痺れて動けないというのは、脳の信号よりも強い電気刺激を筋肉が受けてしまう為で幾ら脳が動けと指示を送っても、動かす筋肉が従わないのでは意味がない。

慎治は再び激昂して殴りかかろうとするが…。

「そこまでしてもらおう。」

不意に制止の声がかかり、三人は声の主に眼を向けた。坂本は注目を集めた事に満足そうな笑みを浮かべると、さも大物ぶった調子で三人を嗜める。

「君達を呼んだのは、試合と漫才をしてもらう為じゃない。ここに  
ある調度はどれ一つとっても、君達に払う報酬よりも高いんだよ。  
乱暴な真似をされては困るな。」

いきなりの金の話に和麻は顔をしかめ、翔は呆れたような視線を向ける。本人としては自分の財力を誇っているつもりなのだろうが、聞かされる方にしてみれば成金臭さが鼻につくだけでしかない。

( 帰ろっかな…？ 前金は貰ってるし…。 )

( 帰って寝よう…付き合いきれない。 )

「ん？」

二人の勤労意欲がなくなった所に前触れも無く、妖気が収束し、新たな展開を告げる。

「来たか。」

先に口を開いたのは、翔だった。屋敷中に拡散していた妖気が、リビングの一転で焦点を結ぶ。当然ながら、和麻もそれに気が付いていたのだろう、二人はさりげなく移動し、妖気と自分達の間には坂本と慎治を挟んだ。

「何だと、何が…。」

和麻達に遅れる事、約数十秒。妖気が黒く濁り出すに至ってから、ようやく慎治も気づいた。

「むっ、出たかっ！」

「な、何だね？ 一体どうしたと言っただい！？」

突然の緊迫した雰囲気には耐えかねた、坂本が上ずった声で喚いた。既に術を行使する為に集中し始めた慎治に代わり、和麻が答える。

「お仕事の時間だよ。あんたに取り憑いた『悪霊』とやらが出てきたのさ。」

適当に答えながら、和麻は尋常ではない違和感を感じていた。

（こいつは悪霊なんてもんじゃないな。しかも別の場所にもう一匹

いやがる…どういう事だ？)

和麻は翔の方に視線を向ける。翔は構えを解きながらも、壁にもたれかけながら、無言のまま油断無く立って居る。

彼ほどの剣士が構えを解く事には当然ながら、理由がある。構えをとればその方向にのみ意識が集中してしまい、他の方向が死角となってしまうのだ。人間相手の一対一ならともかく、複数に囲まれた際や何処から来るか分からない相手には危険以外の何物でもない。それ故に無構えを以ってあらゆる方向からの攻撃に備える。隙を以って隙を消す、それは柳生新陰流において『無形の位』むけいと称される極意である。

少なくとも、和麻が依頼を受けた時、仲介人は『ただの悪霊被い』あくしやうがひと言っていた。

ま、初仕事ならこんなもんだろ？ あんたの実力が噂どおりなら、片手で捻れる悪霊だよ

軽薄そうな男だったが、実績は確かだと聞いている。彼らの仕事は、ある意味術者よりも信用が命だ。これ程大きなミスを犯す事など、



まずありえない。そんないい加減な仲介人が生き残れる程、甘い業界では無いのだ。

そして、翔の様子から考えると彼は最初から、悪霊では無いという事を知っていたと考えられる。そのことから推測すると、彼に依頼を持っていった仲介人は確実に和麻の相手とは腕も信用も上だと言う事になる。

（ハメラれたか？ ま、いいさ。お手並み拝見といこうか。）

和麻は軽く壁にもたれかかると、後で自分にも仲介人を紹介してもらおうと考えながら、腕を組んで見物に回った。

『悪霊』の出現に備えて、慎治は精神を集中していた。出現した瞬間に焼き尽くすつもりらしく、その表情からは明らかに余裕が伺える。『たかが悪霊ごとき』と侮っていたのは明白だったが、和麻も翔も忠告するつもりは無い。

前方の空間が黒く濼んだ。慎治が胸の前で透明なボールを構える様に手を向き合わせる。掌の間に小さい炎が宿った。

おおおおおおおおおおおおおおおおおおおん…。

怨嗟に満ちた声を震わせ、悪霊が姿を現した。溶け崩れた顔が、全ての生ある者に無限の憎悪をぶつける。

「ひいっ」

「はああああつー!!」

悲鳴を上げる坂本に目もくれず、慎治は鋭い気合と共に必殺の炎を放つ。悪霊は炎によって焼き尽くされ、跡形も無く消滅すると、慎治はそう信じていた。

だが…

「ばーか。」

「やれやれ…。」

和麻と翔は一言呟くと、次に起こるのであるう『火事』に備えて結界を張った。和麻はその時に気がついた…『雷術師』であるはずの翔が、水の結界を張っている事に…。

(どういう事だ?)

翔が噂どおりの術者なら、張るのは雷術の結界であるはずと考えていたが、まったく、別の結界が張られている事に。

ぎおおおおおおおおおおおおおおおおおおお……

和麻が自身の疑問に答えを出す前に、悪霊の絶叫が響き、慎治がほくそ笑んだその時、炎が爆発した。

「がああああああつー!?!」

炎に巻かれ、慎治は絶叫した。無意味に広いリビングが一瞬で火の海となる。

呵々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々

悪霊の影に隠れ、慎治の炎を喰らい尽くした妖魔が嗤った。

じゅく…

## 第二章：『再会（後編）』

「神凧も地に落ちたな。」

消し炭になった慎治を眺めながら、翔は呆れた様に呟く。《朱雀》の宿星を宿した少女、《応龍》の宿星を宿した青年…彼の知る二人の炎術の使い手達ならば負ってもかすり傷程度で済み、すぐに次の行動に移っていただろう…。術者としての質の問題なのだろうが…それにしても、酷すぎるといったところか。

神凧一族は炎を操る《炎術師》の中でも、最強と目される一族と聞いていた。もつとも、最近の衰退も聞いていたが…。これほどとは思っていなかったのだろう、翔の表情には明らかに落胆が浮んでいた。

（名ばかりの最強か…あの時の戦いに余計な邪魔が入らなくて助かったな…この連中の…邪魔にしかない…。）

「まあ、そう言いたくなる気持ちは分かるぞ。」

和麻が翔の言葉に同意を示すと、深くため息をつく。あの妖魔は炎の属性を有しており、慎治の放った炎は浄化する所か、逆に吸収され、力を強くしてしまったばかりか、自分の炎によってやられたのだ。何とも情けない話である。自分の力が借り物であるにも係わらず、一族の血の力で精霊を支配し、命令して炎を放ったのだ。精霊術師としての基礎もなっていないのだから、当然の結果である。

居間は文字通りの煉獄と化していた。そこら中で炎が荒れ狂い、高価な家具も絨毯も既に炭化している。派手なシャンデリアはガラス

が溶けて、不気味なオブジェになっていた。

だが炎は風と水の結界により、和麻達には近づく事さえ許されない。熱も遮断しているのか、二人は汗一つかいていなかった。

「…水術に切り替えて正解だったな…。」

一瞬だけ、水術という所に翔が嫌悪を浮かべた事を和麻は見逃さなかった。そして、『切り替える』と言う言葉にも…。

「た、助けて…。」

弱々しい声が二人の鼓膜を刺激する。それを黙殺して、出口に向かおうかと考えている翔に対して、和麻は足元にある黒い物体に視線を向けた。

悲鳴と共に転がり込んだのは、依頼人の坂本だった。あちら此方焦げているが、幸いにも死にそうな様子はなかった。

「ああつ、た、助けてくれ！」

坂本は叫びながら、和麻の足に縋り付く。その姿はさながら、亡者の様であった。だが、決定的に助けを求める相手を間違えている。

「…助けて欲しいか？ だったら、追加料金に一千万払いな。俺は『悪霊被い』を依頼されたが、こいつはそんなレベルじゃないんだ…。」

「付け加えると、別の場所にいた、もう一体がもうすぐここに来るな。」

和麻は翔の言葉に対して、視線だけで同意を示す。

「安いものだろう、自分の命が金で買えるのだからな。」

冷たい笑みを浮かべて、翔は言う。坂本に決断を急がせるように、結界に空いている穴から、入り込む炎が今にも襲いかかろうとしている。

「熱っ、ひっ、ひっ、た、たしゅけて！ 払います！！！ 一万出します！！！」

涙目になりながら坂本は叫ぶ。どれだけ散財しても、結局の所、一番大切なのは自分の命だ。

「「まいどー」」

二人揃って、にこやかに微笑みながら、答えた。

「さて、と。それじゃ、お引取り願おうか。」

坂本を後に蹴り転がすと、目の前の妖魔に対して、和麻は当然のよう宣言した。

「邪魔だな。」

ぼつりと呟くと、右手を横薙ぎに振るった。その手に押し出されるかの様に、荒れ狂っていた炎がまとめて窓の外に放り出される。炎は庭の草木に燃え移る事も無く、散り散りになって霧散した。そして、後には歪んだ顔が張り付いた火の玉：妖魔の本体だけが残った。

消え去った炎に代わり、風が室内を荒れ狂った。和麻は静かに佇んでいる。ジャケットのポケットに手をつ込んだまま、指一本動かさない。それでも風は和麻の意思に従い、炎を削っていく。最早、それは戦いでは無かった。和麻の圧倒的な力の前に、妖魔は身動き一つ取れずに切り裂かれていく。ただ消滅の刻を待つしか無かった。「これで。」

和麻はゆっくりと右手を上げる。霊視力のある者なら、その手に集った精霊の密度に恐怖したことだろう。

「終わりだ！」

上げた十倍の速度で右手を振り下ろす。延長線上に伸びた不可視の刃は、空気分子すら切り分けながら妖魔を一刀の元に両断した。音も無く、霊子の欠片も残さずに消滅していく妖魔を、和麻は冷めた目で見ていた。

廊下に出ると翔は氣を練り上げ、手の中にある神剣『布津御魂剣』に練り上げた《氣》を集中させる。

そして、一連の流れとして、妖魔の出現と同時に剣を構え、技を発動させる。

「劍掌！」

叫び声と共に放たれた氣刃が妖魔を一闪の元に切り捨てる。空気を

切り裂く音を残し、消滅していく妖魔を一瞥し、翔は呟く。

「…今は祈ろう…良き来世を…」

そう呟き、短い黙禱を捧げると二、三度程剣を振ると神剣は木刀へと姿を変えた。

「終わった。」

「終わったぜ。」

屋敷を探查していた和麻と部屋の中に入った翔は、呆然と座り込んでいる坂本に対してそう告げた。風術師である和麻は、風の精霊と感覚を同調する事で三百六十度全方位を『視る』ことが出来る。彼にとって、十キロ以内は索敵範囲内だった。

「金は三日以内に振り込んでおけ。さもないと、この世に生まれた事を後悔する事になるぞ?」

完全に犯罪者のセリフで言う和麻に対して、翔はにこやかに微笑み、坂本の肩を叩くと。

「ここまで被害が有ると、そちらも大変でしょう。私の方は半額の五百万でいいですよ。」

そして、坂本から目をそらし、邪悪に顔をゆがめる。困っている所に手を差し伸べ、次の依頼へと繋げるためである。



そんな翔を呆れた様子で眺めている和麻と、感謝の涙を流す坂本…  
和麻には、にこやかに笑う翔が、なによりも邪悪に見えた。

「う、うむ、分かった。しかし結城君には悪い事をしたな。こんな大事になるとは思っても…。」

坂本が言い終わらない内に、和麻は無言で消し炭に近づき、思い切り踏みつけた。さすがに坂本も声を荒げる。

「な、何をするんだ！？ 君達の間で何があったか知らないが、死体を辱めることはないだろう！？」

「死んでねーよ。」

ぼそりと呟き、何度も踏みつける。すると炭が瘡蓋のように剥がれ落ち、殆ど火傷もしていない肌が現れた。

「こ、これは…。」

「神凧の人間は皆、炎の精霊の加護を受けている。分家の人間だつてこの程度の炎じゃ死にはしない。」

和麻は唇を歪め、自嘲するようにこつ付け足した。

「俺は例外だな。」

それらの様子を翔はただ一人、興味深そうに眺めていた。

「珍しい物を見たな…。」

それを眺めながら、翔は感心したようにそう呟く。そもそも、彼の知り合いの炎使い達ならばそこまでのダメージを追うことすらないのでから。

「う……ぐ……」

そうこうしている内に慎治が目を覚ました。周囲を見渡し、すでに妖魔が滅んだことを確認する。

「お前達がやったのか？」

「見ていた通りだ。」

「確かに、気絶するほどのダメージと言った感じじゃないな。」

『何をぬけぬけと言ってやがる』と言う口調で答える和麻に対して、納得したように翔も同意の意思を示す。意識を保っていたことを見抜かれ、慎治は慌てて釈明する。

「気づいていたのか……。だが、さぼった訳じゃないぞ。本当に動けなかったんだ」

自分を弁解するが、それは明らかに自分を正当化するための物である。

「言い訳なんて聞いてないぜ。」

「……それ以前に……結局、お前がやった事は退魔じゃなくて、放火だろっ……」

呆れたような口調で言い切る翔の言葉が容赦なく、慎治に突き刺さる。

和麻は冷たく言い捨てると、背中を向けて立ち去ろうとする。それに倣って、翔も木刀に姿を変えた神剣を竹刀袋の中に戻し、背中を向け立ち去ろうとする。だが慎治は立ち去ろうとする和麻と翔に、慌てて声を掛ける。まだ聞かなければならない事がある。

「なぜ戻ってきた？　そして、お前は何者だ？」

「戻ってきた？　家は追い出されたが国外追放されたわけじゃないぞ。どこにいようと俺の勝手だ。」

「ついさっき、和麻の言っていた通り、退魔組織『鳳』の退魔師だ。新興の組織……と言うより、ある事情から活動を停止していたが、最近になって活動を再開した組織と言った方が正しいな。」

そう言い切った後、翔は暫く和麻と慎治の遣り取りを見ようと立ち止まり、視線を向ける。

「……何を企んでいる？」

「とくに何も」

和麻は簡潔に答え、肩をすくめる。

「神凧に戻ってくるのか？」

「馬鹿言え、死んでも御免だ。」

吐き捨てる様に言っと和麻は今度こそ迷わず歩き去る。

「…じゃあ、オレも帰らせてもらっかな。」

翔も慎治に背中を向けて、立ち去っていく。翔の言葉の中には唯一つ、言っていない事がある。それは、彼がただの退魔師では無く、その組織を率いる立場にいる事を…。もっとも、彼の組織は一枚岩ではなく、TOPは彼を含めて四人いるが…。

慎治は言い表せない不安に駆られて、何時までも立ち去っていく、和麻と翔の二人の背中を睨み続けていた。

慎治の不安はある意味で的中することになる。神凧を滅亡のふちに追い込んだ戦いは、今、この瞬間から始まったのだ。

余計な相手にまで喧嘩を売ってしまったて……………しかも、売った相手は…。

帰り道…

「どうだ、再会を祝して。」

「男との再会を祝う趣味は無い。」

「同感。」

翔の誘いを一言で切り返す、和麻の言葉に楽しそうに同意の言葉を返す。

「…それはまあ、残念だ…組織への勧誘もしようと思ったんだけどな。」

「最初から、それが目的なんだろうが。」

「龍麻や如月の様に協力者でもいいんだけどな。」

その後、翔が高校時代から利用している自宅となっているマンションの一室に言った時…

「はっはっはっ、遅かったな。」

長い茶髪を後ろで無造作に束ねた男が彼の部屋にいた。

展開に付いて行けず、呆然としている和麻を横目に片付いていたはずの部屋の惨状と冷蔵庫の中身を確認すると翔は神剣を取り出す。

「九角!!! お前は…人の一週間分の食材を食い散らかした上に、オレの貯金を全て酒に換えたな!!!!」

「はっはっはっ! お前の組織にオレも協力してやってんだ、これくらいは。」

翔の剣戟を男は持っていた日本刀で受け止める。

男の名は『九角 天童』…かつての戦いの中で《力》持つ者を墮とし、龍脈の活性化により覚醒する菩薩眼の娘を狙った鬼道衆の頭目。決戦後、生きていた彼は《凶星の者》との決戦の際に共に戦った仲間の一でも有ったのだ。

さて、彼と翔は僅か三人のみの《黄龍の器》である、『緋勇 龍麻』に継ぐ力の持ち主達の一人でも有るのだが…。

「金返せ！！ つーか、死ぬ！！ 今度こそ、地獄に送ってやる！！！」

「はっはっはっ！！！！ やれるもんなら、やってみろ！！！」

低レベルなケンカで力の無駄遣いをしていた。戦いの内容は高次元の戦いなのだが…理由が理由だけに余計に虚しくなる…合唱。

なお、三人目にして龍麻の相棒であった《彼》、『蓬萊寺 京一』は現在、日本を離れて武者修行の旅へとでている。

つづく…

### 第三章：『傲慢』

「知つとるか、和麻が日本に帰ってきとるらしいぞ。しかも風術師になつとつたんだと。」

「なに、あの能無しが？ 風術師ってのは、えらく簡単になれるもんなんだな。」

「いや、俺は黒魔術師になつたと聞いたぞ。あいつが術者になろうとしたら、悪魔に魂を売るしかないだろ？」

「あー、そりゃそうかもしれんな。」

「あはははははははははは……。」

その日、神凧本邸では和麻の噂で持ちきりだった。慎治の報告を聞いた長老、現役を退いた術者の管理を司る者達の一人が面白半分にある事無い事をばら撒いたのだ。それを報告した当の慎治は任務失敗の咎で謹慎している。まあ、失敗どころか、逆に放火したんだから、それは当前と言っちゃ当然の事だが…あの家がどれほど景観を壊しまくる、近所迷惑な代物であつても…

さて、尾鰭と背鰭と胸鰭までつけまくって成長する噂を止める者は、誰ひとりいなかった。噂の発信源である長老はとてもご満悦だった。はつきり言つて長老という人種はよほど真面目な例外を除くと基本的に暇人である。『偉そうにしているのが仕事』などと陰口を叩く者もいるくらいだ。仕事のない時は、日がな一日茶を飲んで、四方山話に興じているような連中である。当然の事ながら、面白い話には目がなかった、慎治の話聞いた時は、内心小躍りして喜んだも

のだ。

ただ、幸か不幸か『鳳』の噂はそれ程持ち上がった…世間一般に『神風よりも良心的で腕も確かだ』と高評価を出され、退魔の仕事の多くが奪われ、鳳の術者に喧嘩を売った術者にいたっては返討ちに有って…『炎恐怖症』やら『氷恐怖症』等等…術者として、いや、一步間違えれば人としてもスクラップにされている…なお、売った術者というのが『黄金の龍を象った手甲を付けた優男』と言っただから…誰に喧嘩を売ってしまったのか容易に想像出来る…はつきり言って、核ミサイルよりもとんでもない相手だ。

閑話休題…

さて、そんな訳で『鳳』の名は神風勢の中で一種のタブーとされているのが現状である。

長老は悄然とした慎治に謹慎を申し渡すとスキップでもしそうな軽い足取りで茶飲み仲間の元に向かい手当たり次第にこう言ったものだった。

「のう、知つとるか……？」

長老は、仕事の時とは別人のように精力的に活動した。一時間としない内に広大な屋敷の中で、和麻の帰国を知らない人間はほとんどいなくなったのである。それこそ使用人に至るまでが、何種類もの噂話を耳にしていた。

それはつまり、正確な話を知る者は皆無に近いということだが、長老にとって大した問題ではない。



『面白ければあとはどーでもいいですよ』と言うのが長老たちの基本的な姿勢だからだ。かくして、和麻の情報は慎治の希望とは正反対の方向で広められた。

曰く

『和麻が黒魔術師になって帰ってきた』

『和麻は殺され、裏庭に埋められていた』

『和麻が仕事でかち合った慎治を瞬殺した』

『和麻は黄龍の器に覚醒した』

『和麻は四霊獣の力を宿した』

『和麻は風の精霊王と契約した。いや悪魔とだ』

『和麻は仙人になって帰ってきた』

微妙に真実が混じっていたりもするが、ここまで来ると誰も信用するものはいなかった。当然、和麻を恐れるものは誰一人としていない。宗家の出来損ないが、母の体内に全ての才能を置き忘れてきた上澄みが、少しはましな力を身につけて戻ってきたらしい。誰もがそう笑い飛ばした。

だが、ごく一部には例外もいた。その内の1人が、現宗主たる神凧重悟である。

夕食の席で笑い話として語られた1件に、重悟は誰よりも興味を示し、詳しく知りたいと思った。

「ほう、和麻が風術を？ 知っていたか、敵馬？」

重悟は臨席していた従兄弟であり、和麻の父親である神凧敵馬に話かけた。

「……は。」

敵馬は短く答えた。すでに噂を耳に入れていたらしく、動揺している様子はない。しかし、その様子から和麻の話をされることを喜んでいないことは明らかだ。『苦虫を噛み潰したような』と言う表現がピッタリのしかめ面をしながら、拳を硬く握り締めている。

目の前に和麻がいたら絞め殺してやりたい。そんな顔つきだった。

「お恥ずかしい限りです。」

部屋の空気が一瞬震える…その場に風術士がいれば気が付いたであろう…ほんの一瞬…

「なぜだ？ 別に恥ずかしいことではあるまい。」

重悟は軽く返すと、召使に命じた。

「詳しく話が聞きたい。慎治を呼べ。」

「かしこまりました。」

重悟の前に現れた慎治は畳に額を擦りつける程に平伏していた。緊張のあまり、額には汗が浮き、呼吸が乱れる。

神風一族において、宗家と分家という身分の差は絶対的と言っていい。下克上など、夢想することさえ愚かだ。

伝統、格式      そのような抽象概念による制度ではない。宗家と分家…その両者を隔絶させているのはただただ圧倒的なまでの力

の差だった。

神風家は世界にも名を知られている歴史ある炎術師の家系である。日本でもその力は大きな存在であり分家でも一流の術者を出している。歴史上では超一流といわれ世界の誰もが知っているような人物も存在している。

だが時代は流れ、一流と呼ばれるものは宗家を含めて見ても数は減っている。神風の術者は100を超えている、その中でも一流と呼んでいいものは10人もいない。だがその術者も世界から見れば一流と呼べるものはごく一部、数名と言えよう。

その一流も、一流の中では下：世界から見たら神風は歴史上での神風の活躍を印籠として振りかざしている、ただの術者：二流、三流と呼んでいい術者ではない。生まれながらに持っている炎の力、伸ばせる力、生かすことができる力が在るというのに宝の持ち腐れにしている。

世界の評価、神風は地に落ち始めている。それに気づかず術者達はいまだに自分達は特別だと考えていた。衰退が進むその中でも世界で名の知られた術者がいた。神風重悟と神風蔵馬。共に神風の歴史の中でもトップと言っていい術者である。特に重悟の名前は日本では知らないものはいないとされていた。世界でもその名は知れ渡っている。その力を前にしたらどうなるか？

もし仮に、分家の術者が総がかりで挑んだところで、重悟や蔵馬にかかれば、小指の先でひねり潰してしまえるのだ。足を失った重悟でもそれは変わらない。その絶望的な力の差を前に、叛意など抱けるものではない。慎治が緊張するのも無理はないと言えるだろう。

神にも等しい自身の絶対的上位者である重悟の前で、無様な失敗談を語らなければならないのだ。それこそ生きた心地もしなかった。

「顔を上げよ。そう畏まることはない。」

重悟は気さくに話しかけるが、宗主の顔を見て話すことは、慎治にはあまりにも恐れ多すぎた。

結局、顔を上げたものの、目は伏せたまま畳を見たまま報告をする。

「で、ではご報告させていただきます。」

再び空気が動く…それは部屋を、屋敷を出て…暫らく言った所まで一本の線…いや、人の動きの様に見えた。

そして、屋敷から離れた所で二人の青年が突然、その姿を現す。

「…で…どう見る？ 翼？」

年齢は20を越えているだろうがその明るい表情と話し方が何処か年齢より下に彼を見せる青年が姿を現し、隣に立つもう一人の翼と呼んだ青年にそう話しかける。

「……………ふざけた手紙でこっちに宣戦布告してきた割にはお粗末な戦力だ…。」

手の中にある手紙…正確にはそのコピーを握りつぶすと翼と呼ばれ

た青年が同時に軽く上に投げる…その瞬間、一瞬にしてバラバラに切り裂かれ、手紙であった物は風に消えていく。

「…無条件降伏と不当な言い分による金銭の要求、月々の上納金…終いには自分達の下部組織になれというふざけた物だ…しかも書いた相手が現宗主の父にして元宗主『神凧頼道』。神凧からの宣戦布告と取るしかないだろうな…。」

翼と呼ばれた…年齢はもう一人の青年と同じくらいであろうがその思慮深い表情から青年落ち着いた印象を与える…対極ともいえるほど違う二人の青年…明るい青年は『紅牙 炎』、もう一人の青年の名を『白羽 翼』…翔の仲間であり、『四霊』の『力』を宿した二人である。

「…それで…実際に見てみて、誰が誰と戦う？」

「…評価できるのは…宗主と現役最強の術者である、重悟と蔵馬の二人、後はまだ見ない未知の相手、その二人の子供の時期宗主ともう一人…はまだ年齢が問題だが…注意する必要ありだな。」

ゆっくりとした口調で推論を述べていく…そして『10』『J』『Q』『K』『A』の五枚のランプを取り出す。

「…神凧重悟にはこっちの『K』…お前に行って貰う。」

「おお あの紫炎の重悟相手か…オレの『応龍』の炎とどっちが上か楽しみだぜ。」

嬉しそうに笑顔を浮かべてそんな軽口を言う。

「…体術に持ち込めば勝てる…炎にしても…錆付いたロートルが相手だ…。次に敵の『A』にはこちらの『A』をぶつける…翔が相手なら負ける姿が想像出来ないだろう…黄龍以外にはな…。次に敵の『Q』にはこっちの『Q』…炎の姫対雷の姫…になる。残るは一人はオレだ…経験の差で勝てると思うが…油断は出来ないだろう。あとは…他の術者…こっちの他の《魔人》に相手をしてもらう…。流石に龍麻の仲間は動かすことは出来ないから、こっちの…翔の弟子を初めとする奴らになるな…。」

「OK、OK。作戦考えるのはお前の役目、オレは精々自分の戦う相手を倒す事だけを考えるさ。」

『A』、『Q』、『J』、『10』と次々にカードを取り出しながら、それぞれが戦う相手を示していく彼に炎は明るい笑顔を浮かべながら軽口を叩く。

「…そうだな、まあ後で四人揃った所で、改めて対神風一族用の戦略は言う予定だが、一応覚えておいてくれ。」

(…あとは風牙衆だな…。彼等には保護を約束して、白羽の一部に組み込めれば……鳳の情報収集能力も高くなるな。)

風牙衆・神風の下部組織…同じ風術師である翼は神風とは違い、風牙衆の能力をよく理解している。情報の重要性…それだけではなく、三年前の戦いで見た翼を初めとする高次元の実力の風術使い…鬼道衆『風角』や、風と霊銃使い『アラン・蔵人』と言った者達の存在から、精霊魔術師達特有の風術軽視と言う考え方は思考に無いのだから。

そして、風牙衆の優秀性を知っている彼等としては、是非とも組み

込みたいのだ…。風牙衆が不当な扱いを受けていながら、何も出来ない理由も理解している。風牙衆は恐れていたのだ、神凧の報復を…それは今までの歴史が物語っている。

少しでも異論と唱えようならばその術者は二度と自分の足で立ちが上がることはできない。そうでなくとも言いがかりをつけられて仕打ちを受ける事がある。例えそれがどんな理不尽なことであってもだ。だから風牙衆は従っていた。今の状態がどれだけ辛かろうがそれに耐える事しか彼らには残されていないのだ。

鳳の考えとしては風牙衆のその状況に対して怒りを感じていた…。知っているからだ、徳川と言う者達に同じ様に虐げられ、鬼へなった悲しき人々の事を…。その怨念は今も残り、鬼となった者達の事を…。

神凧の傲慢からの風牙衆の解放、そして…神凧からの事実上の宣戦布告。彼等が神凧と刃を交える理由は、もう十分過ぎるほどに存在しているのだ。

「ん？」

帰ろうとした時、翼は足を止める…一瞬だけ、感じ取った嫌な気配に…。

(気のせいか…。)

そう思い直し、そこから立ち去る事にする翼であった。

翼の感じた気配は正しかった。だが、彼が仮に気が付いていたとしても、助けたりはしなかっただろう…。一夜の惨劇、神凧家の前で慎治を含む三人の術者が殺されていた…。後には3つの生首が残る。ズタズタにされ、原型を留めていない体とは対照的に傷1つ付いてない首が…。

いつの間にかそれは門前に一直線に並び、それぞれが奇矯な笑みを浮かべた3つの生首は、まるで門から出てくる者達に向けている。それはまるで『悪夢の世界へようこそ』と笑いかけているようにも見えた。

この時、この瞬間より…神凧滅亡への運命は切って落とされたのだ。

つづく…



第四章：『疑惑／吉報』（前書き）

旧第四章と第五章を一つに纏めました。

#### 第四章：『疑惑／吉報』

「まだか！？　いつまでかかる兵衛！！」

その日、神凧家は混乱していた。誰もが慌てふためき、宗家、分家、長老等の例外一つなく、家の者全員が一ヶ所の大広間に集まっていた。

そして、その中心には風巻兵衛がいる。

「　しばしお待ちを。」

背後で急かす男に兵衛は振り向きもせず答え、そつと瞑目した。その両手はまるで水でも掬うかのように窪めて前に差し出している。

『ひゅるり』と兵衛に向かい風が吹いた。風が空気の中に漂う残滓を運び、兵衛の掌に落としては過ぎ去っていく。兵衛の掌に溜まって行く妖気を誰もが息を呑んで見つめていた。

門前に転がる3人の肉片が発見されたのは、翌朝になってからの事だった。その信じられない事態に神凧一族は震撼していた。それも当然、目と鼻の先で身内が3人も殺されたと言うのに…それを防ぐどころか誰一人気づきもしなかったのだ。信じられず、また信じたくもない、認めたくても認めたくないことである。

事実の究明のために直ちに風牙衆が招集され、兵衛自ら空気中に残る妖気をかき集め、敵の正体を洗い出しにかかった。

「ぬじ……。」

「じ、これは……。」

呻きにも似た声が漏れる。兵衛の再現した妖気はほんの掌大の大きさに過ぎない。

だがその妖気の禍々しさと総毛立つほどの冷気はその場にいた者達を……一応は名高き神風の術者達を恐怖させるには十分だった。

「これは風術によるものです。それも風牙衆よりも桁外れに強力な術者が、風の結界に3人を取り込み、虐殺したのでしょう。」

淡々と語る兵衛、その言葉には感情を感じることはできなかった。用意された言葉をただ朗読するかのよう語り続ける。

神風家：その中に只一人、部外者がいる事に誰も気がついていない  
…姿を消し気配を隠している部外者：白羽翼は兵衛の報告を神風一族に混じり聞いていた。

(なるほど、妙な風を感じたから見に来て見れば、あれはやっぱり……。)

先日感じた気配、それが気になった翼は神風家のすぐ近くだという事に気付き、その調査の一環として再び：今度は単独で神風家に忍び込み、現在に至ると言う訳だ。だが、それと同時に一つの疑問を感じ取っていた。

(妙だな……?)

「これは風術による物です。それも我々よりも桁外れに強力な風術士が、風の結界に三人を取り込み、虐殺したのでしよう」

兵衛からの報告は特に有益なものではなかった。そんな事は現場を見れば一目瞭然と言っていていいだろう。

「そんなことはどうでもいい！ 一体誰なんだ、これは誰の仕業なのだ！？」

「これ以上のことは、もう少し時間を頂きませんと……。」

当然の詰問に兵衛は言葉を濁す。そう、翼の感じた疑問はその兵衛に収束するのだ。『鳳』のトップ4にして、四霊の一角を担う風術士である翼の隠蔽は手を抜いていたとしても並の炎術士程度に見破られる様な物ではない……。もっとも、以前にも同じ四霊の一人・雷術が使える二人は別にして - 炎術士である炎に見破られる事は有ったがそれはある種、野性的な直感なのだ。術者としてではない。

だが、そんな『手を抜いている状態』でも、戦闘以外の面では一流の風術士である兵衛が自分に気が付いていない…。イヤ、彼の様子から考えて意図的に無視している節がある。

「さっさとやれ！ それだけが貴様の取り柄だろうが！」

「やめんか」

重悟は罵倒する術者達を黙らせ、兵衛に労いの言葉をかける。

「そうか、ご苦労だった。もう下がっていいぞ。 ところで流

也の具合はどうだ？」

宗主が自分の息子に気を掛けていている事が意外だったのか、兵衛は一瞬、酷くうつろたえた顔をした。そして、翼は横目で侮蔑の視線を重悟へと向ける。

(何を言っているんだこの男は……。)

「は……………安静にしていれば支障はありません。しかし神風一族のお役に立てるほどに回復することはもう……………不甲斐ない息子で、申し訳ありません。」

「病気では仕方あるまい。流也を責めるな、養生させてやれ」

重悟のいたわりの言葉を受け、兵衛はひれ伏し感謝の意を表す。

「は……………ありがとうございます。部下に指示を出さねばなりませんので、これにて……………」

(…炎を連れてこなくて正解だったな…。神風重悟…認識を変えよう、お前の父が歴代で最も愚鈍な宗主なら、お前は歴代で最も『愚かなで無能な』宗主だ。)

怒りを感じながら手を強く握る…。翼の《力》の性質上、どんなに巧く隠しても怒りは力の調整を誤らせ、無意味に大きくなる力はどうしても隠しきれなくなる。だから、怒りを抑える。

(病気じゃない…お前の部下に…お前達の分家みうちに……。)

《それ》を知っている翼は怒りを感じる。同じ風術士として、退魔

士として…目の前の愚か者達への怒りを…。

「よろしく頼む　　期待しているぞ、兵衛。」

風牙衆の長は、無言で叩頭し、姿を消す。それにあわせる様に翼も聞くべき事は聞いたと屋敷を後にした。

敵は風術師であると同時に神風には深い恨みを持つ者。ある意味予想通りの報告に誰もが同じ思いを浮かべる。絶妙なタイミングで日本に戻ってきた男の名と風術士を有する自分達に敵意を持った組織の存在を。

だが、彼等は気付いていないのか、自分達がどれだけ多くの者達に怨まれているというのかを。そして、『鳳』に宣戦布告したのは自分達の方だと言う事にも。

「和麻じゃ！　奴は復讐のために力を身につけ、日本に戻り、『鳳』と手を組んだのじゃ！　者共！　裏切り者の和麻を殺せ！　一刻も早く奴等を抹殺するのじゃ！！！」

金切り声で喚き散らしているのは翼が最も愚鈍な宗主と評価した先代宗主《頼道》である。現役を引退しても尚、先代宗主の威光を嵩に我儘勝手に振舞っているのだ。それ故に一族のほぼ全員に嫌われているが、本人だけはその事にまったく気づいていなかった。

ついでにこれに乗じて、自分の要求に応じる所か逆に無視している『鳳』を潰そうとも考えているのだから。

「父上、先走りすぎです。和麻がやったという証拠も『鳳』と手を組んだと言う証拠も、何一つないのですよ」

重悟は頼道の愚かという言葉さえ勿体ない言動を押さえようと口を挟む。

「手ぬるいつ！ 和麻と奴ら以外に誰が……………」

「先代、少し黙って頂きたい。あなたが口を出すと話が進みません」  
耳障りな声で喚く頼道を、蔵馬がその目に浮かぶ侮蔑を隠そうともせず冷然と遮った。

大した実力もなく、当時宗家でも下から数えた方が早かったくせに、謀略の才能と一族内のパワーバランスによって宗主に選ばれたこの男を、蔵馬は心の底から軽蔑した。

頼道が宗主の地位にあった三十数年間、神風の力は史上最低にまで落ち込んだ。なぜならば、頼道は神風の象徴の神剣・炎雷覇を制御できず、かといって最強の呪法具を他人にゆだねる器量も持たなかったからだ。その結果、炎雷覇は重悟が宗主になるまで倉庫に死蔵されていた。蔵馬は思う、これほど愚かな話はないと、宗主の地位は最強に術者が継ぐ、それが彼の信念だった。

故に、重悟が宗主となったことを恨んでいない。自分の力が及ばなかっただけと納得している。子を次代の宗主に就かせようとした時も、策略によらず和麻を宗主にふさわしい術者に鍛えようとした。

頼道に信念がない。あるのは権力欲のみ。敵馬はそう思っていたし、事実その通りでもあった。

そして、そうした考え隠そうともしない敵馬を、頼道もまた激しく嫌悪していた。伯父と甥と言う近しい関係にあるだけに、二人の憎悪は一層激しく、深いものになっていた。

「お主、和麻を庇おうとしているな？いや、これはお主の企みなのではないか？和麻に異国の術を学ばせ、我らに害意を持つ組織と手を組み、重悟と綾乃を殺し煉を宗主に仕立てるつもりではないだろうな？」

頼道はその矛先を敵馬に向ける。悪意が物質化し、粘液となって糸を引きそつな物言いに、さすがに周囲からざわめきが起きる。

「それは下衆の勘繰りと言うもの。」

敵馬もまた同じように非礼な言葉で返す、彼はまったく気にも留めない。この男の言葉など彼にとっては相手にする価値等ない。

「父上！いい加減になされよ！」

しかし重悟だけは、この暴言を聞き流すことは出来なかった。強引に頼道を退場させる。

「先代はお疲れのようだ。自室に下がって頂け。」

「待たぬか重悟！敵馬を信じてはならぬ！儂の言うことを聞かぬと、必ず後悔することになるぞ！」



頼道は両脇を抱えられながら、荷物のように運ばれながら消えた。

「申し訳ない。父の暴言、私の顔に免じて許して欲しい。」

重悟は畳に両手をついて頭を下げる。それに巖馬は如才なく応じた。

「気になさることはありません。先代も神風を愛すればこそ、あのような発言をなさったのでしょう。」

空々しいやり取りを終えると、二人は顔を見合わせ和やかに笑った。はつきり言って彼らに頼道の相手などしている暇はないのだ。『この話しはここまで』と言う暗黙の了解を得て、実務的な打ち合わせに入る。

「先代の言はともかく、タイミングが良すぎる事も、何故か最近出来たばかりの組織が敵意を持っている事も事実です。一度呼び出して話を聞いた方がいいでしょう。」

巖馬の口調は至って平静だった。第三者である翔達『鳳』の事はともかく到底、自分の息子を詮議している雰囲気ではない。

だが二人は思い違いをしている。和麻は神風家とは既に赤の他人であり、和麻や翔がわざわざ神風に出向く義理など少しもなく、それ以前に『鳳』が敵意を持った原因は神風の方に有るのだ。

もっとも、翔達が神風まで出向く理由は一つだけ有った……それは『全面戦争』である。翔達《四霊》に組する魔人達以外の黄龍の器である緋勇龍麻達の協力を受けるか、彼等が干渉を了承した瞬間にも迫っているそれである。

ただ、彼、『緋勇 龍麻』の性質から考えて間違いない、神風の行いを知ったら神風と戦う道を選ぶだろう、『セイキ奴隷解放』の名の下に……ケンカも売られてるし、そう、『バカ久我透』と言う名の一人のチンピラの炎術士に。哀れ、神風一族：重悟と敵馬だけではなく、この黒幕さえも知らぬところで滅びの道を頼道と一部のバカが原因で勝手に突き進んでいるのだ。

いや、自分たちに向いている最終兵器のトリガーをうっかり押ししてしまったと言った方が正しいかもしれないが……。どちらにしても、哀れ、一部のまともな人達。

「綾乃様がお帰りになりました」

対策を練る二人に 特に重悟には うれしい知らせが届く。

「おお、戻ったか！」

重悟の顔が緩み、敵馬はやや呆れた目でそんな重悟の様子を眺める。待つほどもなく、彼女が現れた。スパーンと景気よく開いた襖の先に、その場にいる全員の視線が集まる。

「ただいま帰りました、お父様！ ………………って、どうかしたの？」

威勢良く現れた少女は、場の雰囲気気づくと訝しげに訪ねた。彼

女の腰まで届くまっすぐな黒髪がかしげた首の動きにあわせて波打つ。

光り輝く美少女だった。少女の出現と共に暗くよどんだ空気が一掃されていく。その身から溢れ出す靈気が室内を一気に被い清める。

正体不明の敵の出現、そして身内の死。暗い話題をつき回していた者達は、まばゆい輝きが不安や焦燥を消し去っていくのを感じた。

朱を刷いた金……それはまさに太陽そのものとも言える輝きの前に、すべての暗い波動は存在することを許さないただそこに在るだけで、闇を被い、光をもたらす強大な靈威。

『K』<sup>キング</sup>である重悟、『A』<sup>アス</sup>である敵馬と評した翼が、彼女が神凧家側の『Q』<sup>クイーン</sup>と呼んだ少女、仮に鳳と全面戦争が起こった場合には『竜宮の雷姫』と戦う事になるであろう、炎の姫。炎雷覇の継承者にして次期宗主の地位を約束された者。それが重悟の愛娘、『神凧綾乃』だった。

「報告はどうした、綾乃。」

重吾が娘をたしなめる。緩みきっていた顔はすでに別人のように引き締まっている。『娘の誇れる格好良い父親でありたい』、それが重悟の信念だった。

「失礼いたしました、宗主。」

綾乃はその言葉を聞きその場に平伏する。眼前の相手を父としての『神凧重悟』では無く、神凧家宗主の『神凧重悟』としてみて。

「解き放たれし妖魔、完全に滅殺いたしましたことを報告します。」

「うむ、よくやった。」

術者として宗主への報告を終えると、綾乃は無邪気に質問を繰り返した。

「で、何があったんですか、お父様？」

「ふーん、鼻先で3人も殺されたのに誰も気づかなかったか。確かに一大事よね。」

遠縁とはいえ身内が3人も殺されたと聞いても、綾乃は落ち着いていた。「一大事」という言葉も「3人が殺された」事ではなく「誰も気づかなかった」事を指している。

冷たい訳ではなく、何を優先すべきか彼女はしっかり把握しているのだ。まだ16歳の少女にしては、驚嘆すべき自制心といえるだろう。

もつとも、それは翔達にも言える事だ。だが、彼等は退魔士として妖魔の戦いだけではなく、《力》を持った人間同士との殺し合い、そして…最強最悪の魔人、そして《陰の器》、そして神とも呼べる存在である黄龍との戦いをも経験している。

そう、仲間の死、己の命を落としかねないような危険な場にも何度となく遭遇している。

頭ではわかっているてもそう動けない時が人間にはある。そういう場で冷静に判断できる力を身に付けなくてはならない。それができなければ次に死ぬのは自分や仲間達なのだ。

「その風術師がだれか、見当もつかないの？」

「疑わしいのが1人…そして、疑わしい組織が一つある。」

綾乃の問いに、重悟は苦々しげに答えた。

「……和麻、そして、鳳だ。」

「……誰、それ？」

冗談抜きで、本気でそう問い返してきた綾乃に重悟は思わずこめかみを押さえて頭を抱えそうになる。

「再従兄の名前ぐらい、覚えておけ…継承の儀で炎雷覇を賭けてお前と争っただろうが。」

そう言われ…綾乃は顎に指を当て、首を傾げる…。そして、その記憶が該当したのか、ポンと手を叩く。

「再従兄って…もしかして、4年前に家出した和麻さん？ あれって争ったってどういうの？」

身も蓋もない言い方…正直すぎる娘の言葉に、重悟は横眼で敵馬

の表情を盗み見る。だが、内心はともかく、外見からは敵馬の感情の揺らぎは読み取れない。

だが、彼女の言葉には嘘偽りは無い。仮にその戦いを翔が見ていたとしたら、こう評していただろう。「公開私刑リンチだな」と、事前に相談などされた日には水属性の攻撃用の宝珠たまを大量に送った事だろう……領収書付きで。

「確か、どつか外国にいったって聞いたけど……そこで修行して風術師になっただって事？」

「そのようだ……最近日本に帰ってきたらしい……八神和麻と名を変えてな。殺された慎治が昨日出会っていた。仕事がぶつかって、見事にしてやられたそうだ。相当な腕のようだな。」

「和麻さんか……やっぱりあたし達のこと恨んでるのかな？」

「かもしれん」

重悟は無表情に……だが、重苦しい口調で答えた。彼とてその事を悩んでいたからだ。過去の彼の体験を知れば、「当然だろう」と第三者が考えてもいいくらいである。

「だが、そうだとしてもむざむざ殺されるわけにはいかん。万が一、和麻が犯人ならば、あ奴の命を以って贖わせる」

「万が一、ね。」

綾乃はちらりと敵馬に眼を向ける。敵馬はそんな綾乃の視線を眉一筋動かさず受け止める。……和麻を追い出した張本人と、その原因と

なつた者の視線が交錯させる。

先に眼を逸らしたのは綾乃だった。術者としての実力はともかく、人生経験では向こうのほうが遙かに上。正直、腹の探り合いで勝つ自身はないのだ。不毛な争いはやめ、重悟に向き直る。

「で、どうするんですか？ 討ちますか？」

和麻や『鳳』に対して遅れをとるなどとは毛ほども考えていない。神風家にいたころの和麻しか知らない、そして、『鳳』にしても最近出来たばかりの新興組織（と言う話しか知らない）相手ではそのように考えるのも仕方ないことかもしれないが。

「和麻や『鳳』がやったと決まったわけではない。取り敢えず、和麻や向こうの代表と会って話をしてみよう思う。」

淡々と物騒なことを言い出す娘に重悟は危険な物を感じる。炎雷覇という圧倒的な力を有するせい、綾乃は何事も力づくで解決しようとする傾向がある。本来強大な力を持つからこそ、それに相応しい精神と柔軟な思考が必要なのだ。次期宗主としての立場を自覚し、もう少し柔軟な思考をして欲しい。重悟は常々そう考えていた。

「まだお前が動く必要はない。別命があるまで待機している」

「……………はい。」

不承不承に頷いた娘に重悟は労いの言葉を掛ける。

「ひと仕事終えたばかりで疲れているだろう、今日はもう下がって休みなさい。」

「……解かりました。」

納得した様子ではなかったが綾乃は素直に尊敬する父の言葉に従った。一礼すると速やかにその場を離れる。作法通りに襖を閉めるまで、一度も重悟と眼を合わせない当たり彼女の抱いた不満が如実に現れていた。

「……………我俣娘が。」

重悟はため息交じりで呟く。しかしそんな苦々しい口調をもってしても、娘への溢れんばかりの愛情を隠し切ることはできなかった。



## 第五章：『遭遇』

極度の疲労…先日の退魔の仕事以上にその後の天童との戦闘で疲労して泥の様に眠っていたのは翔を起したのは、自分の携帯の着信音だった。

「ふぁ…もしもし…」。

その音に目を覚ますと番号を確認する事無く、翔は電話に出る。

『翔さん、オレです。』

「…零斗か…」。

その声に意識を覚醒させると、電話の相手の名を呼ぶ。

『はい、報告します。竜宮本家に居られるのなら、直接報告できたのですが…』。

眠気を感じながら報告を聞いていた翔だったが…報告を聞くたびに意識がクリーンなるのを感じる。

「あいつ等…奴等は和麻やオレ達と話をする気は無い。いや、宗主はそう考えているのだろうかな。」

勝手にバカな主張をされた上に濡れ衣で攻撃されては堪ったものではない。向こうが攻撃してくる以上、受けてたつのみだ。

『ええ、和麻さんの居場所はすぐに調べが付きました。偽名も使わ

ず本名で堂々とホテルに宿泊していましたから。』

電話から聞えるホテル名と住所をメモする。場所は大体分かる、今の和麻の実力ならば心配は無いだろうが急いで向かった方がいい。

『それともう一つ…。翼さんからの報告ですが…風牙衆の様子がおかしいらしいです。そちらの方にも注意していてください。』

「分かった、詳しい事は本家で聞く。」

そう言葉を返し携帯を切り、マンションを後にする。先日の戦闘と勝手に食い散らかされた分で散らかった部屋を片付けずに出るのは気が引けるが…後で片付ければいい。

さて、神凧は『鳳』に遅れる事数時間、ようやく和麻の居所を見つけた。そして巖馬の命により、2人の術者が和麻の確保に向かった。確保に送られた『結城慎吾』と『大神武哉』。共に神凧分家の中ではトップクラスの実力者である。性格が正反対な割には不思議と相性がよく、2人が組めば宗家以外に敵は無いとさえ言われている。巖馬にしてみれば手持ちのカードの内、最強の2枚を出したただけだったのだが、結城家の長男を選んだ事は致命的なミスだった。そもそも、この男には和麻を説得する気など欠片もなかったのだ。

同時に神凧の術者を監視させている者からの連絡が翔の元へと届く、和麻が確保に送られた2人の術者を無力化した事を知り、一刻も早くそこに辿り付くため急ぐのだった。

無力化：つまり、避ける事も出来ず、防御する事も出来ない、殺したい者にとっては最小限の力で殺す事の出来る最適な状態なのだ。

「まったく、お父様も心配性よね。あたし1人で充分だって何度も言ってるのに、いつになったら1人前だって認めてくれるのよ。そんなに私って信用できない？」

「宗主はとつくにお嬢を認められているさ。それでも1人娘を心配するのは父親として当然のことたる？」

不満たらたら綾乃を、40代半ばの男が宥めていた。横浜、山手町にある某神社で綾乃は解けかかった封印の補強を命じられた。

偶然にもそこは先日、和麻と翔が除霊を行なった場所の目と鼻の先だったが、綾乃がそれを知るはずもない。

現地赶赴いてみれば、封印の劣化は予想以上に進行していた。綾乃は即座に再封印を断念し、封じられたものを滅ぼす事に決めた。一瞬も躊躇う事無く封印の壺に張られていた呪符を引き剥がす。曰く『そのほうが手っ取り早い』とことだ。

自分の実力に絶対の自信を持っていないなければいけない台詞であるが、同行する2人の男達もそれが分不相応な自信ではないと知っていた。

無論、重悟も知ってはいたが、それでも心配せずにはいられないのが親心と言つものだ。

重悟は親馬鹿丸出しでそう考え、常に2人以上の術者に綾乃を護衛させていた。だがそれが綾乃にとってプラスになっているかいないかは分からない、寧ろ彼女の實力では護衛にはならないだろう、實力で劣る者達は護衛とは言わないのだ。

「公私混同はするなって、いつも言っているくせにさ。自分勝手だと思わない、雅人叔父様？」

まだ不満を抑えきれずに、綾乃は男………大神家当主の弟、雅人に愚痴る。

「宗主とて人間なんだ。そう杓子定規に考えることも無いだろうよ。」

雅人は骨太な笑みを浮かべて笑い飛ばした。分家の人間にしては随分遠慮のない口の聞き方をしている。しかし綾乃の方もそれを咎める様子はない。

この男、大神雅人は兄をはるかに凌ぐ力を持ちながら、当主の座を巡って争う事を嫌い、チベットの奥地まで修業の旅に出たという変わり者だった。日本に戻ってきてからは「綾乃のお守り」を以って任じている。重悟の信頼も厚く、綾乃の初陣からずっと護衛役を続けてきた。

綾乃もまた、この豪放磊落を絵に描いたような親戚を気に入っている。周り中からお姫様扱いされていた綾乃にとって、雅人の媚びる事のない態度はとても新鮮で、心地よく感じた。

今では『雅人叔父様』『お嬢』と気安く呼び合い、家族同然の間柄になっている。

「若い術者に勉強させてやっているとしても考えるんだな。なあ武志……………武志？」

「は、はいっ!？」

当然のように綾乃に見惚れていた若い術者『大神武志』は、叔父に繰り返し呼びかけられ、ようやく我に返った。

「聞いてなかったな……………お嬢に見惚れるのは理解できるが、気を抜くなよ。封印はもういつ解けるか分からないんだぞ。」

「き、聞いていましたとも! 叔父上のおっしゃる通りです! 綾乃様の戦いぶりを見せて頂ければ、これに勝る喜びはありません!」

綾乃の前で恥を書きたくない一心で、武志は必要以上に力を入れて叫んだ。彼の綾乃を見つめる目は、まるで女神か何かを見ているようだった。彼女を見つめるその目には、尊敬を通り越して崇拜の色さえ浮かんでいる。これは特に異常な反応ではなかった。武志と同世代の術者にとって、綾乃は女神にも等しい存在だった。そんな姿を間近くで見ることのできる護衛の任務を望まない者など皆無と言つてよかった。

「そーゆーもん？」

「そうですね!」

綾乃に話しかけられた喜びを、武志は全身で表した。綾乃はこういう感情を向けられる事を好まない。自分が神風のような『普通じゃない』世界でさえも『普通』とは隔絶した人間であることを思い知らされ、いたたまれなくなるのだ。

しかし、そうした思いを理解しろといつても無理であろう。武志は純粹に、自分よりも遙かに強大で美しい存在に敬意を表しているだけなのだ。

「ま、いいけどね……………そろそろかな。」

妖気の高まりを察知し、綾乃はその場で半回転して本殿に相對した。プリーツスカートの裾がふわりと広がる。これから立ち回りを演じるというのに、綾乃はなぜか高校の制服を着ている。高校から直行したからではない。まじめに高校生をやっていたら、最も多く着る服は当然制服になる。そこで重悟は制服を特注し、能う限りの呪的防御をかけたのだ。素材は気を通しやすい最高級の絹。それも糸をつむぐ時点から気を込め続けたという、途轍もなく高価な代物を使っている。さらに、目に見えない部分に魔法耐性を向上するアミュレット（護符のこと）を着けている。金と手間隙を惜しみなくつぎ込んだ結果、芸術品と言うべき高校の制服ができあがった。しかし費用もそれにふさわしいもので、これ一着で車を買えるところではなく、はつきり言って豪邸が建つ。

『鳳』の関係者達が聞いたなら、はつきり言って『金の無駄』と言うような代物だろう。元々、彼等の場合、以前 龍麻達と共に戦っていた時から、その手の体制に関しては複数人で共通して使える代物を使っているのだ。

まあ、綾乃は性能云々以前に父のプレゼントだからという理由のた

めだろうが、この制服を気に入り常にこの服で戦いに臨んでいる。間違いなく世界で最も高価であろう戦闘服に身を包み、綾乃は崩壊寸前の封印を見据えた。

細く長い呼吸を繰り返し、体内に宿る力を活性化させる。『ばぁん！』と清冽な拍手の音が空間を振るわせる。合わせた掌を引き離すと、両掌の間を炎の線がつかなく。綾乃は炎の線を右手で掴み、それを引き抜くように横薙ぎに振るった。

一メートルほど伸びた炎の線は、瞬時に物質化し緋色の剣を形作る。そして、あまりにも強大な霊威がこの地を覆う。この剣こそが神風の至宝・炎雷霸。神風の始祖が炎の精霊王から承ったとされる降魔の神剣である。代々神風の宗主に与えられる神剣。

剣を扱う彼女の動きは何万、何十万回と繰り返し修練を続けた果てにこそ辿り着ける、完成された動きだった。

そして、ついに限界を迎えた壺が鈍い音を立てて砕け散る。その破片が本殿に落ちるよりも早く、壺の中から白いものが綾乃目掛けて射ち出された。

綾乃は真つ向から炎雷霸を振り下ろし、それを迎撃する。熱したフライパンに水をかけたような音をたてて、蒸発する白い物質。

「粘液………?」

その物質を見て、綾乃は小さく呟く、前方に目をやると本堂の暗闇にいくつかの光点が灯っている。それはゆっくりと前進し、その全身を白日の下にさらけ出す。

「うわ……………」

綾乃はそれを見て思わずうめき声を漏す、暗闇より現れたのは巨大な蜘蛛の化け物だった。

数えるのも嫌になる複数の目。全身に汚らわしい剛毛を生やし、8本以上の足を有する。さらにはカサカサと長い足を動かしている。その姿は間違いなく、見る者に例外なく生理的な嫌悪を引き起こさせる。

「土蜘蛛か……手を貸そうか？」

「けっこお。」

綾乃は即座に雅人の申し出を断る。気持ち悪いのは確かだが泣き言を言える立場ではない。何よりも父に失望されるのが怖かった。それに比べればクモやゴキブリと戦う事など何程のことか。

(おいで……………)

炎の精霊に呼びかける。肉声は必要ない。綾乃の意思に応え精霊は自ら進んで集い、炎雷覇に飛び込んでいく。それによって、刃の纏う炎が：剣より放たれる破邪の力が一層輝きを増す。

意思の届く限りの精霊に綾乃は助力を請う。ほかの術者のように支配し命令することはしない。いやそんな必要はない。それがどれほど傲慢なことか、父に何度も教えられてた。

『我々は対等なのだ』と、重悟は常にそう語る。精霊は世界の秩序を守る存在。神凧一族は精霊王との契約により、精霊の協力者の任



を負ったのだと。綾乃は知っている。自分の力が借り物に過ぎないのだと。精霊術師は皆力を借りているのだ。強大なその力を。世界の『歪み』である魔性を封じ滅するため、そしてこの世界の秩序を守るために一時的に与えられたものに過ぎない。故に命令はしない。そんなことをする必要は無いとわかっているから。正しい願いに、精霊は必ず応えたと知っているから。

世界に対する敬意を忘れないように、強大な力を得たと錯覚して傲慢にならないように、綾乃はいつもこう呼びかける。『お願い、力を貸して……。』と

「す……す……す……。」

武志は呆然と呟く。

膨大な数の精霊が綾乃の下に集まっていく、自分が支配していたはずの精霊まで根こそぎ持っていかれた。初めて目の当たりにする宗家の力は、まさに桁違いと言っしかない物だった。

「ああ、すごいだろ？」

我が事のように誇らしげに、雅人は笑った。

「さっきはああ言ったが、勉強になるはずないんだよな。俺達がどう頑張ったって、あんなことできっこないんだからな。」

叔父に返事をするのも忘れ、武志はひたすら綾乃だけを見ていた。

綾乃は炎雷覇を構え、対峙を続ける。

(どうしようかな…あまり近付きたくないし……………。)

炎雷覇は呪法具である以前に剣である。やはり剣として使ったときにその威力を最も発揮する。つまり直接斬撃を加え、その上で内部に炎を伝わらせて、焼き尽くす…これが、炎雷覇と呼ばれる神剣の使い方であると綾乃は心得ていた。

しかし……………

(斬りつけた瞬間、切り口から得体の知れない粘液なんか飛び出して…爆裂させた瞬間にその破片が身体に降り掛かったり…ううん、もし雌だったら、腹から何百匹の子蜘蛛がわらわらと…どれもいやああああ!!！)

これはある意味余裕と取れる態度だが、こんなことを気にしているようでは、はつきり言って実力はどうあれ退魔士としては二流以下である。そもそも、翔が聞いたら『バカ』の一言に尽きるだろう、炎雷覇の力なら斬撃を加えた瞬間に焼き尽くせるのだ。気にする以前に跡形もなくなるだろう。

そんな綾乃の煩悶を隙と取ったのが、土蜘蛛は脚を器用に動かし、反転する。

「逃げる気!？」

とっさに走り出した綾乃に向かって土蜘蛛は尻の先から白い糸を吐き出す。綾乃は炎雷覇を振り被り、金色の炎が糸を焼く。とめど

なく吐き出される糸に阻まれ炎は本体に届かない。綾乃は足を止め、意識を集中した。呼吸を整え、意識を研ぎ澄ます。

(ちまちまやっても埒があかない、一撃で決める！)

上段に振り被った炎雷覇を、綾乃は渾身の力で振り下ろす、金色の炎 最高位の浄化の炎 - が土蜘蛛から吐き出された大量の糸をもともせず焼き払い、土蜘蛛本体へと迫る。

その瞬間、爆音が轟き、土蜘蛛が炎に包まれる。

「やった……よね……？」

炎が消えていく中、自信なげに呟く綾乃の目の前に、白い繭のようなものが映った。思わず眼を瞪る綾乃の前で、それはピキピキとひび割れていく。それは薄いガラスが割れるような音をたてて繭が割れ、その中から傷一つない土蜘蛛が現れる。

恐らく己の作り出す糸に靈気を遮断させる性質があるのだろう。それで自分の身体を覆い隠し、浄化の力の浸透を防いだのだ。

「……やって、くれるじゃないの……。」

綾乃は抑揚な口調で言った。それは一見、平静のように見えるがよく見るとこめかみが引きつっている。今の一撃は決して手加減したわけではない。それを完全に防がれて、綾乃のプライドは痛く傷付いていた。

「たかが虫ケラの分際で……！！」

綾乃の怒りに応え、さらに膨大な炎の精霊が集結する。炎として具象化してはいないものの、境内の内部は火山の火口にも匹敵するほどの精霊に埋め尽くされていた。

「さあ……覚悟はいい？」

怒ってはいるが、綾乃は我を忘れてはいない。冷静に怒りをコントロールし、力へと転化する。強く、強く精霊に呼び掛ける、今度は全方位ではない。細く絞った意志を、特定の場所の特定の精霊に向けて解き放つ。

綾乃は炎雷覇を身体の正面で垂直にかざし、身長に狙いを定めた。深く息を吸い、呼吸と共に鋭い気合を放つ。

「はっ！！」

直後、土蜘蛛の体内で炎が弾けた。膨らんだ腹が裂け、小さな火柱が立つ。その小さな炎を目印に、境内中の炎の精霊が殺到する。炎は爆発的に増大し、土蜘蛛を今度こそ灰も残さず焼き尽くす。

後には何も残らなかった。土蜘蛛の身体の破片はおろか、撒き散らしていた妖気も跡形もなく浄化されている。今までにここに妖魔がいたという痕跡さえ残されていなく、神社らしい清浄な気が境内に満ちている。

「ふふんっ。ざっとこんなもんよ。」

綾乃は妖魔の消滅を確認し、得意げに振り返る。

「さすがはお嬢だな。大したもんだ。」

「さすがです！ 綾乃様！！」

二人の護衛はその強大なまでの力をただ見て驚くしかない。自分達では絶対にこんなことは出来ない。

「まあね」

褒められたことがうれしいのか、綾乃はさらに得意げな笑みをする。

「さあ、帰りましょうか」

もはやここに用はない。任務も達成し、あとは帰って宗主である父に報告するだけのはずだった。だが…

「そつだな、宗主に報告を……………むっ！？」

最初に自分達を襲う異変に気づいたのは雅人であった。神風の術者は索敵や諜報を風牙衆に任せきつているため、感知系の術や能力は総じて低い。術者としてのポテンシャルが綾乃よりずっと低い雅人が先に気づいたのは、ひとえに彼が退魔士としての豊富な経験から、周囲の精霊の様子などに常に気を配っていたからである。

目の前の妖魔を討滅した時点で気を抜き、周囲への配慮を怠ってしまふあたり、その点では、まだまだ綾乃は経験不足であると言える。

その瞬間、禍々しい漆黒の風が吹き荒れ3人を閉じ込める。

「え……な……なによこれえ！」

「く、叔父上。これは一体!？」

突然振って沸いた異常事態に綾乃が狼狽し、武志も何が起きているのか把握できないようだ。その中で唯一、雅人だけは落ち着いていた。彼は宗家を除き分家だけならば神風で最強の術者。さらにチベツトで修行したこともあり、こういった突発的事態への対処に関しても冷静に見極められる。そして、宗家の術者でもこれだけ優れた判断力をもっているものは重悟や敵馬くらいなのは、綾乃の反応を見れば分かる事だろう。

「二人とも落ち着け! どうやら風の結界に閉じ込められた様だ。」

その言葉に綾乃はハツとなる。『風の結界』、それは昨日起こった事件と同じ。神風の術者が惨殺された事件。その犯人が今、自分達を襲っているのだ。

「じゃあ、これって和麻さんがやってるの!？」

綾乃は父から聞かされた容疑者の名前を出す。その時。この空間を支配している者の声が、全方位から流れてくる。

『フフ。先ほどは見事な手並みであったぞ神風の術者よ。』

「なっ!」

『早速だが、貴様等には私の血肉となつてもらおう。おとなしく喰われてくれるとありがたい。』

「貴様何者だ！」

相手の姿は掴めないが、この気配は紛れもなく妖魔、それも先程の土蜘蛛とは比べ物にならない程の妖気である。それは間違いなく上級クラスの妖魔なのだろう、強大な妖気が境内に充満している。

そんな強敵が今、眼前に突如として現われ、その上、自分達を喰らうと言つたのだ。三人は、冷たい汗が皮膚をつたうのを感じた。

『我が契約者、八神和麻の命により貴様ら神風に死の鉄槌を下そう。

』

「和麻だと!？」

その名を聞いたとき、全員がやはりと思つた。タイミング的にもおかしかつたし、たった四年で強力な風の力を身につけてきた。八神和麻の使う風の力は精霊魔術ではなく、この妖魔に借りたものなのだと、誰もが思つた。綾乃はやつとこの事件の首謀者が誰であるか知つた。

《やはり父の言う通り、あの男が今回の事件を起こした。神風に復讐するために、自分達を皆殺しにするため》と、だが首謀者を知つたからにはここから逃げ出し、そのことを報告しなければならぬ。

『さあおとなしく、その身を我に差し出せ!!』

「冗談！ 誰がアンタなんかに喰われるもんか！ 叔父様！」

「ああ。みんな！ 炎を放つぞ、タイミングを合わせる！」

「は、はい!!」

魔人達の合体必殺技《方陣技》の如く、三人はタイミングを合わせ炎を放とうとする。綾乃は炎雷覇を構え、雅人と武志は持てる力のすべてを引き出す。

この三人がかりの攻撃なら、いかに強大な妖魔でもあるていどはダメージを耐えられるだろう、無論それだけで倒せるとは思わない。だがこのことを本家に報告しなければならぬ。

そのため一時的にここから逃げなければならぬのだ。彼女達の間だけで到底、滅ぼすことの出来ない相手である。ここは一度引き、態勢を立て直すべきだ。そうすれば、神風は犯人である和麻を討ち、この妖魔を持てる力のすべてを使い滅ぼせばいい。

「いつくわよ！ いつけえええええ!!」

綾乃は炎雷覇を大きく振りかぶる。そこから今まで以上の強大な炎が放たれる。

「うおおおおお!!」

「はああああ!!」



雅人も武志も持てる力のすべてを使い、妖魔に放つ。

三つの炎が一つになり、さらに強大な力を得る。これだけのエネルギーを持つ火球を防げるはずはない。仮に防げたとしても、この結界は消滅する。誰もがそう思った。だが……………

『無駄な足掻きを。』

三人の遙か頭上に黒い巨大なものが出来上がっていく。それは黒い風の塊。それが巨大な火球に向かい放たれる。その二つが激しくぶつかり合い、共に消滅していく。

「そ、そんな……………」

「ま、まさか……………」

「こ、こんな事って……………」

「ま、まだよ。炎雷霸を突き立てればいくらアンタでも……………」

そう、まだ自分達には炎雷霸と言う、絶対的アドバンテージがある。これを突き立てればいくら強大な妖魔であろうと倒せるはず。だが、それを成すには一つ大きな問題が立ちふさがっている。

『ふう。姿を確認できない私にどうやってそれを突き刺すつもりだ？』

「くっ……………」

その妖魔の言う通りだった。まだ自分達は相手の姿さえ確認していない。この強大な結界がある限り相手の姿を見ることなど叶わない。

『まあいい。冥土の土産に私の姿を見せてあげましょう。』

「えっ？」

その直後、結界の中に爆発的に妖気が収束する。

「な、なんて妖気だ」

さすがの雅人でさえ、この醜悪にして強大な妖気に当てられ身体を震わせている。

「う、うわああ……。」

武志も、今まで感じたこともない強大な妖気に恐怖する。足がすくみ一歩も動かない。少しでも気を抜くと意識を失ってしまいそうだ。

「ば、化け物……。」

綾乃は収束する妖気の方角を睨む。そこには黒い風が集まっていく。そして段々とそれが消えていく。その中から現れたものは……

「な、なによ、あれ」

現れた妖魔は黒い人型の妖魔、もっとも顔は確認できないが……。

『さあ、姿を見せましたよ。それで滅ぼすんじゃないかなかったですか？』

それはあからさまな挑発だった。姿を現すことなどしなくても簡単にこの場の全員を殺すことは出来た。だが、あえてそれをしない。圧倒的な余裕、こいつは遊んでいるのだ。

それに傷つくのがいやだから、先ほどまで様子を観察していたのに今になって現れたのは、綾乃を脅威と感じなくなったから。『この小娘では自分を傷つけることなど出来ない』と判断したからだ。その事実が、綾乃のプライドを逆撫でした。

「こ、の！ ふざけるんじゃないわよ！ あたしの前に出てきたことを後悔させてやるわ！」

綾乃は炎を精霊を炎雷覇に集め、目の前の妖魔に切りかかる。

「い、いかん！ お嬢、やめろ！！！」

だが雅人にはわかっていて。今の綾乃では100%勝てないということ。あまりにも力の次元が違いすぎる。

「はああああああ！！！！！」

綾乃は全力で炎雷覇を振り下ろす。これが妖魔の身体に触れれば勝てる。だが、それが妖魔に届くことはなかった。

「そ、そんな……………」

炎雷覇は相手の身体に届く前に、妖魔の操る黒い風に阻まれた。凄

まじいまでに黒い風を収束させた盾。それが完全に炎雷覇を防ぎきる。

『なかなか、いい一撃ですが、相手が無防備に斬られるのを待っている訳がないでしょう?』

「ツ!? きゃああああ!!!」

妖魔から風が綾乃に向かい放たれ、その凄まじい風が綾乃を吹き飛ばす。

「お嬢!」

雅人はなんとか震える身体に命令し、綾乃をその身体で受け止める。

「大丈夫か!？」

「う、うん……けど。」

その瞳には恐怖が宿っていた。全力の一撃をあっさりと受け止められた。不幸な事に綾乃はここまで力のはなれている相手と戦った事などない。それどころか自分と同格のものとさええない。

仮にこれが今まで、自分達以上の相手と戦ってきた翔や龍麻達、魔人達ならば解決策を見つけ出す事は簡単だろう。例えそれが高校生と言う、綾乃と同じ年代に戻したとしても。

そんな彼女がこの状況を打開することなど出来るはずもなかった。

その様子を見て、雅人は考えをめぐらせる。この状況では全滅して

しまう。何とか二人を逃がさなければ。だがどうすればいい。自分達二人を合わせた力さえも遙かに凌駕している綾乃でさえ、相手に傷一つ付けられなかったのに自分がこの状況を打破できる訳はないならば、自分の取るべき行動は一つ。

（特攻しかないか。結界をどうにかできれば二人だけでも逃げられる。）

自分がする事は決まった。もはや方法はこれしかない。命を捨てて、この結界を破壊する。自分の命を糧に大規模召喚を行なえばいくら強力な結界でも破れるはず。雅人は綾乃を武志の傍に降ろす。彼は《未来》を護る為に決意を決める。

「お、叔父様？」

綾乃はその尊敬する叔父が何か覚悟した顔をしているのがわかった。死を覚悟した顔。それが彼女にもよくわかった。

「お嬢、武志。俺がこの結界を何とかする。その間にお前達は何とか逃げろ。」

「そ、そんな叔父様！」

「だめです、そんなこと！ 僕もお供します！ 綾乃様を守るためならこの命……。」

「だめだ！」

二人に向かい、雅人はきっぱりと言い放つ。

「若いお前達が死んでどうする？　ここは俺に任せる。一瞬だけでもチャンスを作る。だから……。」

悲壮な決意を決め、そう言い放つ。

だが…

「叔父様！　だめです！　あたしも戦います！　まだ負けたわけじゃない！」

「お嬢ならわかっているはずだ。今のお嬢じゃ100%勝てない。奴は神凧の全術者を集結させなければ。」

その言葉を綾乃は痛いほど理解できた。分かっているのだ、今の自分では手も足も出ない事を。だが……だからと言って叔父を見殺しには出来ない。

決意を決めた者が

「あたしは次期宗主です！だから、こんなところで逃げるわけには  
いかない！！」

綾乃の瞳から恐怖が消えた。彼女は叔父を犠牲にして自分だけのう  
のうと生きていることなど出来ない。ここで叔父と共に妖魔と刺し  
違える覚悟ができた。炎雷覇を握り、妖魔に向き直る。それを見て、  
武志も恐怖を振り払い構える。

「叔父上、僕も逃げません！ 分家ですが、神風の術者として戦い  
ます！！！」

「お前達……………」

雅人は感心した。まだ子供だと思っていた二人が、ここまで精神的  
に成長したとは。だからなおさらここで死なせるわけにはいかない。  
何とか二人を助けなければ。

命を掛ける時

『話しは済みましたか？ そろそろこっちも食事の時間にしたいんですけど。』

相手から吹き出る凶悪な気配。今にも襲い掛かってくるだろう。

「アンタをここで滅ぼして、あたし達は和麻を討つ！ それで全部終わりよ！！！」

綾乃は先ほどよりも強大な妖気を浴びているはずなのに、まったく動じていない。それどころか、感じる気配が前よりも強くなっている。

(この数分の間に成長した？ すさまじい成長力……だが……)

『すばらしい決意、覚悟。それでこそ、我が血肉となるに相応しいならばそれに敬意を表して我が最大の一撃で屠ってくれよう！』

いくら成長しても、それだけでは自分は倒せない。たかだか十の力が十一になったところで、百以上の自分を倒せなどしない。妖魔の前方に強大な妖気が収束を始める、これほどの妖気はいくら神風の浄化の炎といえど神炎でもない限り相殺できないだろう。

(や、やられる……！)

彼女たちは死を覚悟した。その攻撃が放たれんとしたその時





誰もが見とれる笑みを浮かべながら、気安いが力強く、そして…絶  
対的な威圧感を持つ声が妖魔へと告げられた。

『き、貴様…何者だ！？』

先ほどまでの余裕は既に妖魔にはない。理解しているのだ例え己の  
力が百でも、千をも超える相手には勝てないと。

「オレは…《緋勇 龍麻》。まあ、言わなくても分かりきった事だ  
ろうが、あえて宣言しておこう。お前の……………敵だ。」

彼女達を救った者、その名は《緋勇 龍麻》…神の如き《龍脈<sup>ムゲン</sup>》の  
《力》を宿す《黄龍の器》。

第五章：『遭遇』（後書き）

魔人学園の主人公、《緋勇 龍麻》の登場でした。

## 登場人物（前書き）

話が進むのにあわせて、追記していきます。

## 登場人物

オリジナル

『竜宮 翔』

龍麻と共に鬼道衆とその頭目『九角』や柳生と戦った《宿星》の一人、四霊チームの中で最強の剣士であり、同時に最強の術者でもある。四霊の一体、鳳凰の力をその身に宿しており、雷術を中心に学んでしまったために本人が苦手となってしまった地術以外の術、炎、水、風、雷の術を得意としている。これは元々陰と陽の性質を持つ鳳凰の力の応用として扱うものであり、彼の本来の得意技は光術である。冷静で仲間思いの性格、隠し事が多い。

宿星：四霊《鳳凰》

風の聖痕

『八神 和麻』

旧名『神凧 和麻』。ご存知、風の聖痕の主人公。本編の主人公の一人、設定は聖痕本編に準じている。翔とは昔からの親友でもあり、龍麻とも親友になる（予定）。なお、彼の父親の名前である『巖麻』は龍麻の父親である『緋勇 巖馬』と字が違っただけで同じ名前。

東京魔人学園剣風張

『緋勇 龍麻』

ご存知、ゲーム、東京魔人学園剣風張の主人公。本編の主人公の一

人、魔人サイドの主人公を勤める。その続編である幕末が舞台の『東京魔人学園外法張』の主人公『緋勇 龍斗』の子孫。なお、この名前はゲームでは自由に変えられるが、ここではこの名前で進めさせていただく。

表の顔は大学生。裏の顔は『鳳』所属の退魔士。

彼が一人暮らしの大学生であるとは思えないほど裕福であり、それはこの仕事による収入が膨大であることに加え、高校時代に旧校舎で稼いだお金がなかなか底を尽かないということが言えるだろう。なお、恋人は誰かは秘密。

- ネタバレ注意 -

『如月 翡翠』

『玄武』の宿星を持つ、江戸時代より人知れず東京を守ってきた公儀隠密・飛水家の末裔にして、水を操る『力』を持つ。

翔の誘いで家業の骨董品店を経営する傍ら、『鳳』所属の退魔師として龍麻の相棒として活動している。だが、本来の相棒である京一との自分差を感じて力不足を感じている。

また、翔の依頼で高校時代同様に武具の調達や修理、アイテムの販売を行っている。（仲間と言えど代金は取るのは高校時代同様）

現在は龍麻と翔の武器を修理の為に東京にはいないが…。

## 登場人物（後書き）

現在の登場人物の実力比  
龍麻く（超えられない壁、黄龍的な意味で）<翔||和麻く翡翠

## 第六章：『鬼面』

何故だ？

《それ》は心の底から慟哭する。

- 何故それだけの力を持ちながら、奴らに…神風に味方する？ -

目の前の…《緋勇龍麻》と名乗った男からは、眩しいほどに強大な力を感じる。

何故、奴らの時には助けが来る！？

心の底から怒りと憎しみの感情が湧き出す。

何故、お前は俺達を助けてくれなかった！？

( やれやれ、散歩の途中で妙な妖気を感じてきてみれば…。 )

恐怖から憎悪へと浮かべていた感情を変えた妖魔を詰まらなそうに眺める。翔が『面白い家を見つけた』と言うからその家を見に行く



途中で妖気を感じ取り、その現場に来て見れば、妖魔に殺されそうになった綾乃達を見つけ、助けに入ったのだ………それも、ただで

（報酬も出ないのに、使命でもないのに、何でこんな奴と戦わなきゃならないんだ、オレは？）

結界を叩き壊すために放った鳳凰が直撃して片腕を失った物の……どう見ても強敵以外に評価する言葉が出てこない相手と戦うには善意という言葉だけでは、ちょっと足りない。だが、それでも彼と言う人間は無視できる人間ではない。それが出来る人間は《緋勇龍麻》では無いのだから。

『妖魔を……妖魔をするなああああああああああ……！！！』

（向こうは向こうでこっちにターゲット変えて、やる気満々だな。仕方ない、幸いにも怒って判断力が鈍ってそうだし、大技使って、一気に決めるか。）

妖魔は狂気と怒りを込め、龍麻へと向かい風刃を放つ……だが、龍麻は相手の動きを読んだかのように右手を振り上げ、

「《深雪》。」

そう吹き冷気を纏わせた右手を一直線に振り下ろす。それにより発生した薄い氷の壁が風刃を弾く。

『貴様、貴様、貴様あああああああ！』

何度目かの風刃により氷の壁に罅が入り始めそれを合図に龍麻と妖魔を隔てていた氷の壁を壊す。それを見た妖魔は『ニヤリ』と顔を

歪める。壁の向こう側に居る龍麻へとトドメを放とうと最大限の力を集めた瞬間、

『い・・いない!?!』

妖魔の怒りによって熱くなっていた頭が冷静さを取り戻した瞬間、龍麻が何処に居るのかを感じ取る。

「おおおおおおおおおおお!!! 秘拳・青龍!!!」

怒号と共に放たれる斧を遥かに凌駕するスピードで蹴りが妖魔の腹に叩き込まれる。それが唯の力任せの蹴りならば物理攻撃・防御力に人間よりも優れた妖魔の肉体を破壊できる訳がない。しかし龍麻の蹴りにはたつぷりと《氣》が込められていた。しかもそれは唯の《氣》では無い。

司る方位は東、季節は春、色は青、イメージは新緑。其は大地に根を張り雄々しく枝葉を張り伸ばした大木、その青葉を揺らす風。そしてそれらを司るは四神が一、東方の守護者《青龍》

その《青龍》の《氣》を乗せたその一撃こそ、彼の持つ大技の一つ《秘拳・青龍》。蹴りによって発生した衝撃波は強風・暴風すら超越した颶風（きょうふう）・風力30メートル以上の風を意味する、これ以上の表記は存在しない最強の風・と化した。

『くおおおおおおおおお!!! た・・耐えた…なに!?!』

思わず妖魔は目の前の光景に目を見開き驚愕を露にする。蹴りの一撃にて、軽々と上空へと妖魔を吹き飛ばした龍麻の体には、まだ上向きのベクトルが残り、妖魔を追撃する形で跳躍・上昇。その途中で再び《氣》を練り上げるが、『木行に属する妖魔である相手には通じない』と考え、今度は《青龍》ではない。

両手に雷氣を纏わせ、更にその両腕も金氣により硬化させる。

「破あああああああああああああああ！……」

司る方位は西、季節は秋、色は白、イメージは雷。硬く鋭い鋼と轟く雷鳴。司るのは四神は西方の守護者《白虎》

上空とは思わせない威力を持ち咆哮と共に叩き込まれる連打。

『ガハア。』

「秘拳・白虎！……」

トドメとばかりに今まで手一番の破壊力を持った拳を大地へと落下していく妖魔の背中に叩きつける。

隕石の落下の様な轟音を起しながら、妖魔の体は頭から地面へと落ち小規模なクレーターを作る。そのままは何事も無かったかのように優雅に着地するとそのまま妖魔を視界に納める。

一瞬何が起きたのか理解が出来なかった…突然結界を突き破った光の鳳凰が妖魔の片腕を飲み込み、次に現われた青年が圧倒的な力で妖魔を圧倒している。

「な……………なにが起こってるの？」

綾乃は状況が把握できず雅人と武志のほうを見るが、その武志の方でも何かなにやら分からないように周りを忙しなく見回しているが、経験を積んでいる雅人は流石と言うべきか、真剣な多分に驚愕を浮かべてはいるが、表情でその戦いを一瞬たりともを見逃すまいと見ていた。

「金行の奥義で生きてるのは、驚きだけどな……………これでトドメだ。」

自身の持つ技の中で最強の奥義に準ずる力を持った奥義に必要な氣を練り上げ、すぐさま妖魔へと放とうとする。その破壊力は誰よりも妖魔自身が知っているだろう…結界を突き破って尚、自身の片腕を消し去る程の破壊力なのだ。直撃してしまえば一撃で消し去られるだろう。

だが…

「チツ！」

それに気が着いた龍麻が腕を振るった瞬間、彼の周囲の地面を何か

が削る。

(今のは…精霊魔術とかじゃない…オレ達と同じ《力》だと!?  
しかも、アランや風角と同じ…風の…。)

「へー…よく気が着いたな。」

「……………」

(なん…だと?)

妖魔の傍らで聞こえた突然の声に驚き、そこに視線を向けた瞬間、  
龍麻の顔を驚愕が支配する。

そこに居たのは二人の人物、頭から地面に突き刺さっている妖魔を  
掘り起こしている男と、自分達に注意を向けている男。全身を忍者  
装束で包んでいる。……………だが、何より龍麻を驚かせているのは彼  
等の顔を覆っている物。

(鬼の…面…。)

その服装から、かつて戦った最初の敵《鬼道衆》を連想させる男達  
を警戒し、注意深く観察する。妖魔に殺されそうになった後ろの三  
人は当てに出来ず、足手纏いの可能性が高い。それなりに実力を持  
った相手…それも内二人は自分と同じ《力》を持った《魔人》が二  
人、三対一では少し苦戦するだろう。

( どうする、まずは鳳凰で分散させて一人ずつ各個撃破か？ だが、相手の射程によっては…。 )

敵が動く前に瞬時に戦い方を模索するが、まだ答えと言つ名の一枚絵は浮んでこない。

「これ以上戦うのは得策ではないな。」

「そうそう、神風の雑魚だけじゃオレ達で始末できるんだけどさ。じゃあ引かせてもらうよ。」

だが、幸いにも敵は龍麻の思惑を知ってかしらさか、敵は引く事を宣言した。

そう宣言した瞬間に突然、吹き荒れる暴風…それに一時的に視界を奪われると、その一瞬の間に妖魔と二人の男達は姿を消していた。結界は消え、妖魔が地面に叩きつけられた時に出来たクレーターが戦いの痕を残している。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2006b/>

---

風の聖痕 ～風の王と龍脈の守護者～ 第一部

2010年10月18日06時27分発行